

北海道立埋蔵文化財センター 重要遺跡確認調査報告書

第19集

興部町 興部豊野竪穴群(B)

令和5年度
北海道立埋蔵文化財センター

北海道立埋蔵文化財センター
重要遺跡確認調査報告書

第19集

興部町 興部豊野竪穴群(B)

令和5年度
北海道立埋蔵文化財センター



遺跡遠景（東から）

写真提供：(株)シン技術コンサル

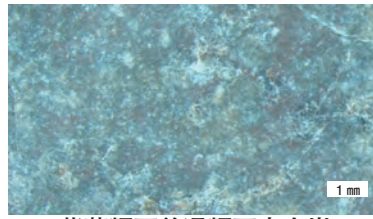


竪穴 4 調査状況（西から）

豎穴 8 出土板状礫

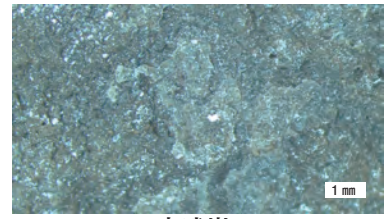


雄武町日の出岬



紫蘇輝石普通輝石安山岩

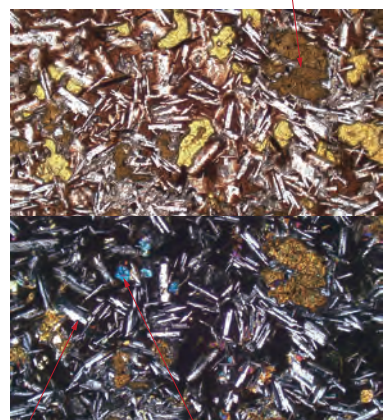
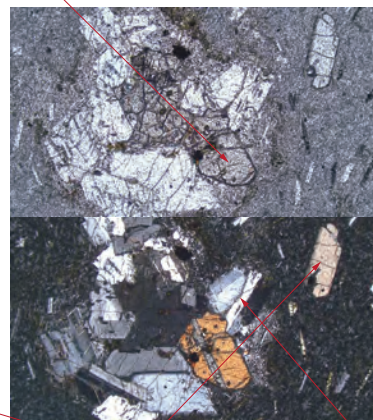
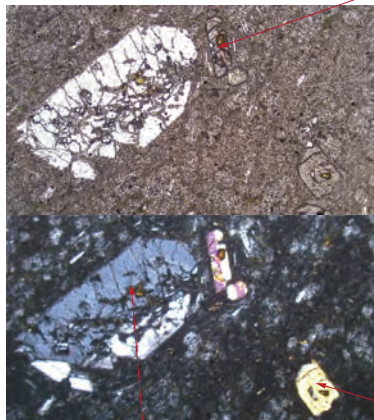
興部町沙留岬



玄武岩

Cpx (単斜輝石)

緑泥石

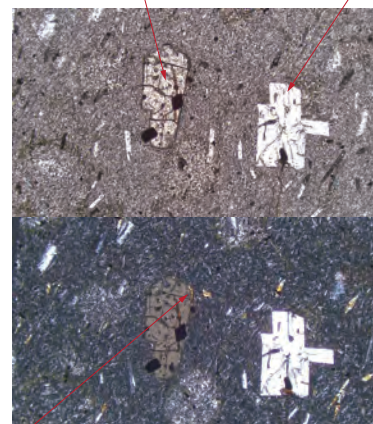
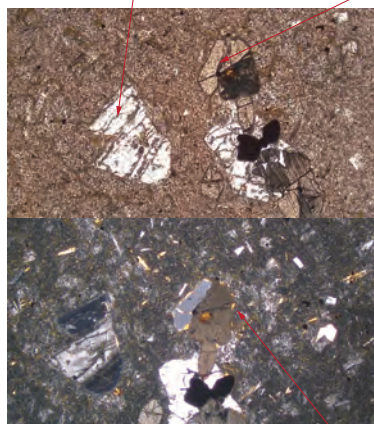


PL (斜長石)

Opx (斜方輝石)

PL (斜長石)

Cpx (単斜輝石)



反応縁?

剥片画像の 1 mm

写真上オープンニコル
写真下クロスニコル
×40

興部豊野豎穴群(A)豎穴 8 出土板状礫の素材岩石 (Ⅲ章(2)参照)

例 言

- 1 本書は令和5年度に北海道立埋蔵文化財センター指定管理者 公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した重要遺跡確認調査の報告書（第19集）である。
- 2 本書は興部町興部豊野竪穴群(B)についての調査成果報告書である。
- 3 本書の編集は立田 理が担当した。
- 4 マルチコプターによる空中写真撮影は、株式会社シン技術コンサルの協力と写真の提供を受けた。
- 5 地形測量図、竪穴分布図などの縮尺は挿図ごとに明記した。記載のないものは任意縮尺であるが、各図にはスケールを付している。
- 6 掲載した遺物の実測図及び写真の縮尺は、土器：3分の1（図Ⅱ-17のみ4分の1）、剥片石器：2分の1、礫・礫石器：3分の1とし、スケールを付した。
- 7 石材表記の一部に以下の略号を用いた。
An：安山岩 Ba：玄武岩 Cha：チャート Gra：花崗岩 Mu：泥岩 Obs：黒曜石 Sa：砂岩
Tuff：凝灰岩
- 8 基準点測量および基準杭の設置は株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 9 重要遺跡確認調査報告書は年次報告の性格上、調査・整理途中の成果報告を含むため、過年度報告の内容に誤りや変更等があった場合は、本書をもって正とする。
- 10 調査・報告にあたり、下記の諸機関及び各位のご指導・ご協力を、また地権者様より特段のご配慮をいただいた（順不同・敬称略）。

北海道教育庁生涯学習部文化財・博物館課

北海道興部高等学校 相澤秀樹 山本融一

北海道オホーツク総合振興局網走建設管理部 興部出張所

国立アイヌ民族博物館 田村将人

興部町教育委員会 畑山研二 多田宏治 中田希望 大井重美

興部町 佐藤克宏

名寄市 氏江敏文

札幌市 清水昌樹 宮塚義人

目 次

口絵

例言

目次

I	重要遺跡確認調査について	1
1	重要遺跡確認調査	1
2	今年度の調査について	1
II	興部町興部豊野竪穴群(B)の調査	3
1	調査の概要	3
(1)	調査要項	3
(2)	調査体制	3
(3)	調査の経緯	3
(4)	調査の経過	5
(5)	調査結果の概要	6
2	遺跡周辺の環境	8
(1)	遺跡の立地	8
(2)	周辺の遺跡	8
3	調査の方法	12
(1)	基準点測量と基準方眼杭の打設	12
(2)	発掘調査	12
(3)	遺物整理	14
4	調査結果	16
(1)	基本土層	16
(2)	発掘調査	16
(3)	出土遺物	24
III	分析と総括	29
1	分析	29
(1)	出土炭化材の樹種同定について	29
(2)	興部豊野竪穴群(A)竪穴8出土板状礫の素材岩石について	32
2	総括	34
	報告書抄録	43

挿図目次

図Ⅰ－１ 国、道指定史跡の位置と重要遺跡確認調査	1
図Ⅱ－１ 興部町史掲載図	3
図Ⅱ－２ 史跡指定関連文書添付図面①	4
図Ⅱ－３ 史跡指定関連文書添付図面②	5
図Ⅱ－４ 令和４年度調査範囲と地籍図上の堅穴分布	7
図Ⅱ－５ 遺跡の位置と周辺の地形	9
図Ⅱ－６ 周辺の遺跡	10
図Ⅱ－７ 興部豊野堅穴群(A)と(B)の位置	11
図Ⅱ－８ 測量杭配置図	13
図Ⅱ－９ 調査トレンチの設定方法	14
図Ⅱ－10 堅穴と調査トレンチ位置図	15
図Ⅱ－11 堅穴４	17
図Ⅱ－12 堅穴５	19
図Ⅱ－13 堅穴14・15	20
図Ⅱ－14 堅穴16・17・18	22
図Ⅱ－15 堅穴19・20・21	23
図Ⅱ－16 出土遺物	25
図Ⅱ－17 参考資料（興部高等学校所蔵資料）	26
図Ⅱ－18 興部高等学校所蔵図	27
図Ⅱ－19 興部高等学校所蔵写真	28
図Ⅲ－１ 炭化材の電子顕微鏡写真(1)	30
図Ⅲ－２ 炭化材の電子顕微鏡写真(2)	31
図Ⅲ－３ 遺跡の位置と供給源候補石材の分布範囲	33

表目次

表Ⅰ－１ 重要遺跡確認調査一覧	2
表Ⅱ－１ 調査結果一覧	6
表Ⅱ－２ 実測遺物一覧	28
表Ⅱ－３ 堅穴別出土遺物点数集計結果	28

写真図版目次

口絵１ 遺跡遠景	
堅穴４ 調査状況	
口絵２ 興部豊野堅穴群(A)堅穴８出土板状礫の素材岩石	
図版１ 堅穴４	
堅穴４トレンチ３A 土層断面	
堅穴４トレンチ１ 土層断面	
堅穴４トレンチ３B 土層断面	
堅穴４トレンチ２ 土層断面	
図版２ 堅穴４トレンチ３B カマド断面	
堅穴４トレンチ２ 遺物出土状況	
堅穴４・５間トレンチ 掘上げ土堆積状況	
堅穴５	
図版３ 堅穴５トレンチ３A 土層断面	
堅穴５トレンチ１ 土層断面	
堅穴５トレンチ３B 土層断面	
堅穴５トレンチ２ 土層断面	
堅穴５トレンチ３B カマド検出	
堅穴５トレンチ３B カマド土層断面	
堅穴５トレンチ３A 炭化材出土状況	
図版４ 堅穴14トレンチ 土層断面	
堅穴16トレンチ 土層断面	
堅穴15 調査状況	
堅穴15トレンチ 焼土検出	
堅穴15トレンチ 土層断面	
図版５ 堅穴17トレンチ 土層断面	
堅穴18トレンチ 土層断面	
堅穴19トレンチ 土層断面	
堅穴20トレンチ 土層断面	
堅穴21トレンチ 土層断面	
図版６ 出土遺物	
参考資料 興部高等学校所蔵の土器	

I 重要遺跡確認調査について

1 重要遺跡確認調査

北海道立埋蔵文化財センターは、これまでに北海道教育委員会（以下、道教委）が北海道史をたどる上で重要であるとした遺跡の重要遺跡確認調査を行ってきた。平成12年度は小樽市・余市町の西崎山ストーンサークル、13・14年度に奥尻町青苗砂丘遺跡、15・16年度は恵山町（現函館市）恵山貝塚、17～21年度は幌延町・豊富町の音類堅穴群、22・23年度は斜里町朱円周堤墓（道指定史跡「斜里朱円周堤墓及び出土遺物」）、24・25年度は芦別市野花南周堤墓群（道指定史跡「野花南周堤墓群」）、26～28年度は岩内町東山1遺跡（道指定史跡「岩内東山円筒文化遺跡」）、27～29年度は湧別町シブノツナイ堅穴住居群（道指定史跡「シブノツナイ堅穴住居跡」）、平成30年度・令和元年度は湧別町川西2遺跡、令和2～3年度は興部町興部豊野堅穴群(A)、令和4年度は興部町興部豊野堅穴群(B)を調査対象とした。

2 今年度の調査について

今年度は昨年度に引き続き興部町興部豊野堅穴群(B)を対象とした。具体的な調査内容は道教委作成の「令和4～8年度重要遺跡確認調査実施要領」に基づき、道教委、興部町教育委員会との打ち合わせを経て計画されたものである。

本報告書（重要遺跡確認調査報告書第19集）では、興部豊野堅穴群(B)の発掘調査成果と資料整理成果についてまとめた。

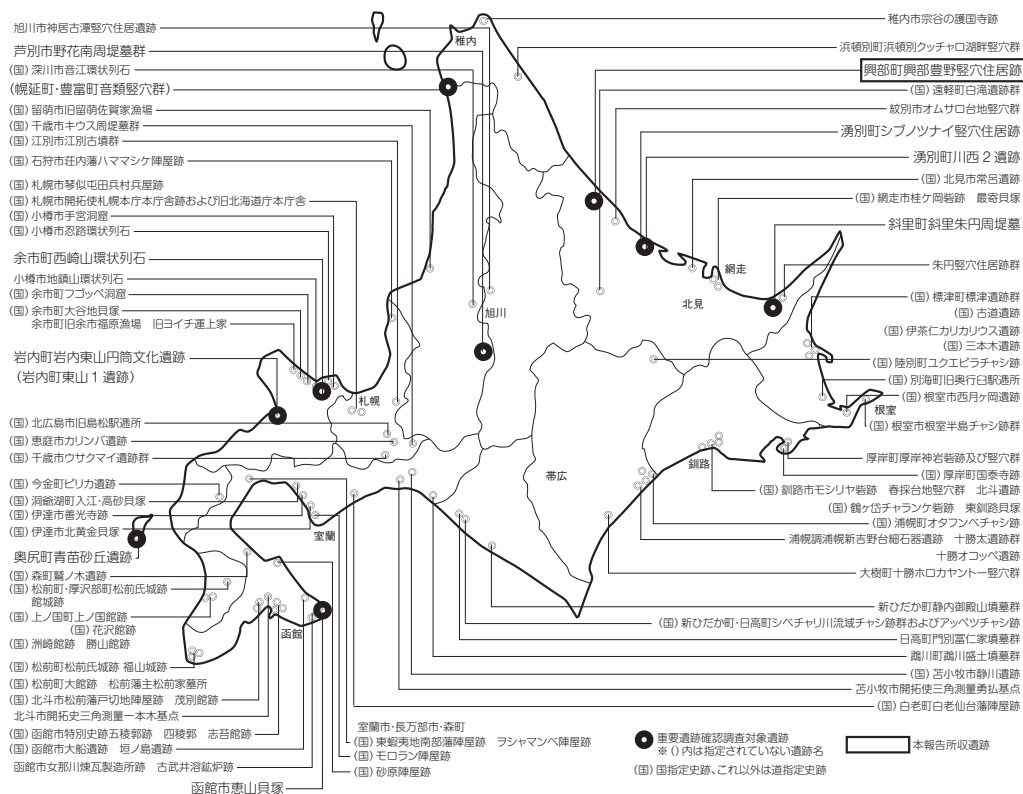


図 I - 1 国、道指定史跡の位置と重要遺跡確認調査

表 I - 1 重要遺跡確認調査一覧

対象遺跡	登録番号	所在地	種別	調査年度	主な調査方法	調査面積	主な時期	主な調査遺構	主な出土遺物	掲載報告書
小樽市 余市町 西崎山 ストーン サークル	01203- D-01-64 (小樽市) 01408- D-19-04 (余市町)	小樽市蘭島 余市町栄町	配石 遺構	平成12年度	発掘調査	140㎡	縄文時代 後期	配石遺構	縄文時代後期、晩期 の土器、黒曜石の剥 片	重要遺跡確認 調査報告書 第1集
奥尻町 青苗砂丘 遺跡	01367- C-07-4	奥尻郡奥尻町 字青苗364・ 368番地	集落跡	平成13年度	発掘調査	90㎡	オホーツク 文化期 擦文文化期	住居跡1軒 土坑1基 貝塚1か所 焼土3か所	オホーツク式土器、 土師器、石器、 石製品、骨角器、 金属製品 自然遺物	重要遺跡確認 調査報告書 第2集
				平成14年度	発掘調査	90㎡	オホーツク 文化期 擦文文化期	住居跡4軒 墓2か所 貝塚1か所	恵山式土器 オホーツク式土器 土師器及び擦文土器 石器類玉など石製品、 骨角製品、金属製品、 自然遺物	重要遺跡確認 調査報告書 第3集
函館市 恵山貝塚	01202- B-10-35	函館市字恵山 308番地の1 ほか	貝塚	平成15年度	発掘調査	97㎡	縄文文化期 前半	堅穴式建物の可 能性のあるもの 6か所 墓の可能性のある もの4か所 遺構覆土中に形 成された魚骨層 を2か所で確認	土器、石器、骨角器	重要遺跡確認 調査報告書 第4集
				平成16年度	発掘調査	169㎡	縄文文化期 前半	盛土遺構（縄文 文化期のもの で、厚さは1m を超える） 堅穴住居跡1か所 土坑2か所 集積1か所 焼土	土器、石器、 骨角製品	重要遺跡確認 調査報告書 第5集
幌延町・ 豊富町音類 堅穴群	01488 (幌延町)- 01510 (豊富町)- G-09-01	天塩郡幌延町 字浜里188 ほか 国有林174～ 175林班	集落跡	平成17年度	測量調査 踏査	約6km ² (測量範囲)	擦文文化期 アイヌ文化期	堅穴状の窪み 796か所 チャシ跡3か所	踏査のため出土遺物 はなし。	重要遺跡確認 調査報告書 第6集
				平成18年度						重要遺跡確認 調査報告書 第7集
				平成19年度						
				平成20年度						
斜里町 斜里朱円 周堤墓	01545- I-08-38	斜里郡斜里町 朱円西76番地 1	墳墓	平成22年度	発掘調査	210㎡ (トレンチ 調査面積)	縄文時代 後期	周堤墓2基 (A号、B号)	縄文土器片 ※昭和23、24年度調査時の 出土遺物の資料化を行う	重要遺跡確認 調査報告書 第8集
				平成23年度		重要遺跡確認 調査報告書 第9集				
芦別市 野花南周堤 墓群	01216- E-04-021	芦別市野花南 町3256.3257	墳墓	平成24年度 平成25年度	発掘調査	86.5㎡ (トレンチ 調査面積)	縄文時代 後期	周堤墓2基 (1号、2号)	縄文時代後期から 晩期土器片、黒曜 石石器類	重要遺跡確認 調査報告書 第9集
岩内町 東山1遺跡 (道指定史 跡岩内東山 円筒文化遺 跡を含む)	01402- D-13-01	岩内郡岩内町 東山15、 16-1・2番地	集落跡	平成26年度	発掘調査	600㎡ (トレンチ調 査等面積)	縄文時代 前期 縄文時代 中期	盛土遺構2か所 堅穴住居跡4軒 土坑19基 柱穴状ビット7基 焼土12か所	縄文土器片 (前期から中期) 石器類 (礫石器を主とする)	重要遺跡確認 調査報告書 第10集
				平成27年度	発掘調査	60㎡ (トレンチ調 査等面積)				重要遺跡確認 調査報告書 第11集
				平成28年度	整理作業	-				重要遺跡確認 調査報告書 第12集
湧別町 シブノツナイ 堅穴住居群 (道指定史 跡シブノツ ナイ堅穴住 居跡)	01559- I-21-35	北海道湧別郡 湧別町川西 499-1、499-2 930 722-1 722-2 722-3 720 719 503 502-1.2 714 717 718	集落跡	平成26年度	踏査	139.486㎡ (測量範囲)	縄文文化期 擦文文化期 オホーツク 文化期	堅穴530か所	縄文土器片 (後北C ₂ ・D式) 石器類	重要遺跡確認 調査報告書 第10集
				平成27年度	測量調査					重要遺跡確認 調査報告書 第11集
				平成28年度	測量調査					重要遺跡確認 調査報告書 第12集
				平成29年度	測量調査 発掘調査	30㎡ (トレンチ調 査等面積)				重要遺跡確認 調査報告書 第13集
湧別町 川西2遺跡	01559- I-21-56	北海道紋別郡 湧別町川西 501-1,508,509	集落跡	平成30年度	測量調査	約17,000㎡	縄文文化期 擦文文化期	堅穴102か所	縄文土器 (後北C ₂ ・D式) 擦文式土器（後期） 石器類 炭化材・炭化木製品 鉄製品	重要遺跡確認 調査報告書 第14集
				令和元年度	発掘調査	47.5㎡				重要遺跡確認 調査報告書 第15集
				令和2年度	整理作業	-				重要遺跡確認 調査報告書 第16集
興部町 興部豊野 堅穴群(A)	01561- I-24-6	北海道紋別郡 興部町 字豊野1-1	集落跡	令和2年度	測量調査 踏査	約25,000㎡	擦文文化期	堅穴30か所	-	重要遺跡確認 調査報告書 第16集
				令和3年度	発掘調査	43.0㎡	擦文文化期	堅穴住居跡9軒	擦文文化期 甕 紡錘車・礫 縄文文化期 後北C ₂ ・D式土器・ スクレイパー	重要遺跡確認 調査報告書 第17集
興部町 興部豊野 堅穴群(B)	01561- I-24-7	北海道紋別郡 興部町 字豊野9-1	集落跡	令和4年度	測量調査 踏査	約9,900㎡	擦文文化期	堅穴26か所	-	重要遺跡確認 調査報告書 第18集
				令和5年度	発掘調査	40.3㎡	擦文文化期	堅穴住居跡3軒 炭窯2基	擦文文化期 甕 炭化材	重要遺跡確認 調査報告書 第19集

Ⅱ 興部町興部豊野堅穴群(B)の調査

1 調査の概要

(1) 調査要項

調 査 名 称 重要遺跡確認調査
 調 査 対 象 興部町興部豊野堅穴群(B) (I-24-7)
 所 在 地 紋別郡興部字豊野 9-1
 調 査 面 積 40.3㎡
 調 査 期 間 令和5年10月11日～11月1日

(2) 調査体制

北海道立埋蔵文化財センター指定管理者 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター

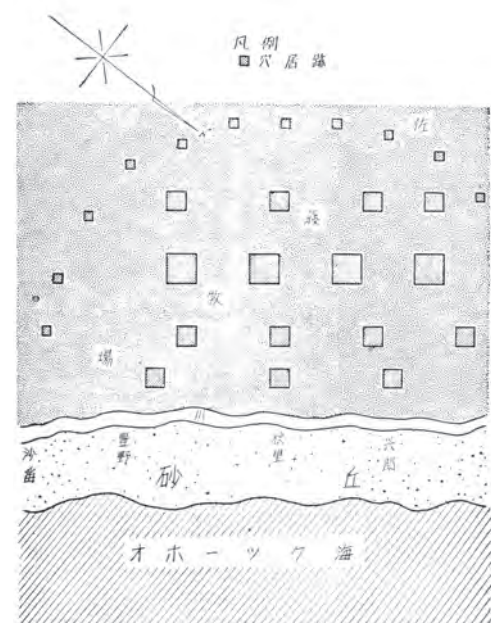
理 事 長 長沼 孝
 事 務 局 長 馬橋 功
 常 務 理 事 鈴木 信
 総 務 部 部長 馬橋 功 (兼務)
 第1調査部 部長 鈴木 信 (兼務)
 第1調査課 課長 中山 昭大
 主査 立田 理
 主任 菊池 慈人

(3) 調査の経緯

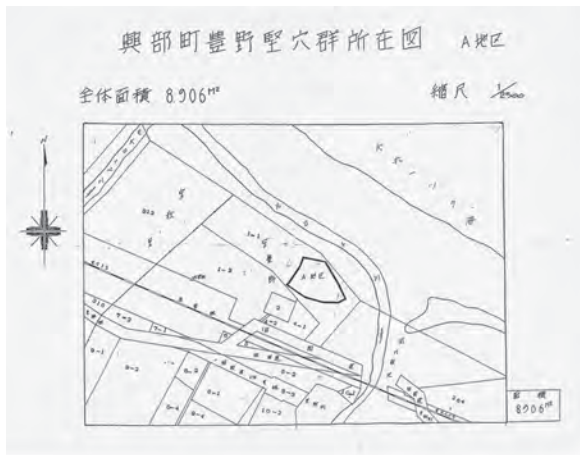
ア. 昭和期の調査・記録

本遺跡の刊行物における初出は、昭和36年4月25日刊行の『興部町史』とみられ、掲載図「興部付近先住民族遺跡分布図」で佐藤牧場全体に堅穴が分布する様子が図示されている。堅穴は大・中・小の方形で表現され、大4か所、中11か所、小11か所が大型を中心に中～小へと整然と広がる様に配置されている(図Ⅱ-1)。但し、砂丘に並走する川(瑠椋川か)の下に「沙瑠」「豊野」「秋里」「興部」の7kmほどに及ぶ広範囲の地名が列記されており、図の縮尺等を含め不明な点が多い。

昭和40年2月に名寄高校郷土研究部が刊行した『道北文化研究No.5』では、同校が昭和39年に興部町で実施した発掘調査及び一般調査の概要が報告されており、興部豊野堅穴住居群(A)について、堅穴30軒を確認したことや、堅穴の深さ、興部町史に掲載された堅穴住居跡の位置関係に誤りがあることなどが記載されている。



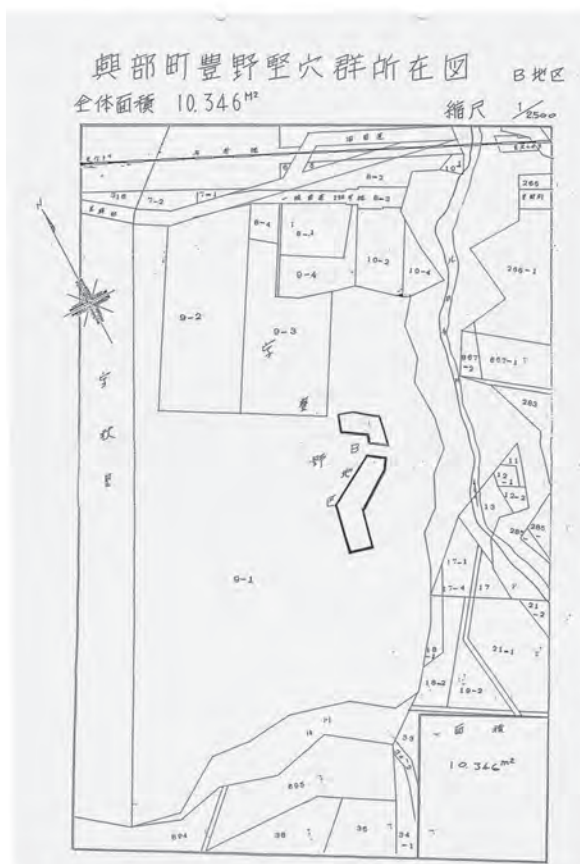
図Ⅱ-1 興部町史掲載図



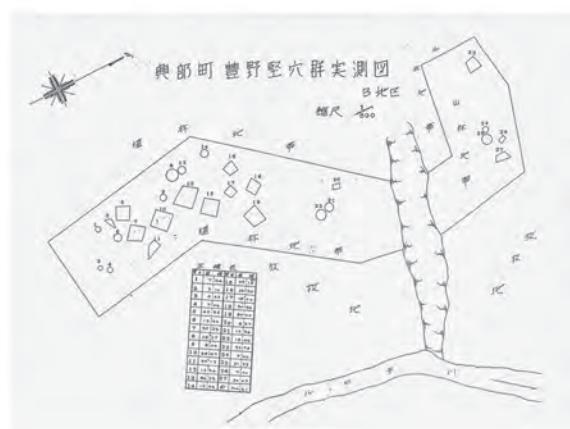
1 興部町豊野堅穴群(A)所在図 (地籍図上の指定範囲)



2 興部町豊野堅穴群(A)実測図



3 興部町豊野堅穴群(B)所在図 (地籍図上の指定範囲)



4 興部町豊野堅穴群(B)実測図



5 興部町豊野堅穴群(A)写真



6 興部町豊野堅穴群(A)写真

図Ⅱ-2 史跡指定関連文書添付図面①



7 興部町豊野堅穴群(B)写真 (北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課提供)

図Ⅱ-3 史跡指定関連文書添付図面②

昭和41年（1966年）6月に北海道文化財専門委員であった北海道大学教授の大場利夫氏が「オホーツク海沿岸における先史時代堅穴集落跡の調査」のなかで、興部町内の遺跡について視察などの調査を行っている。調査報告書には「豊野A地点（堅穴群(A))はオホーツク海に東面し、しかも瑠椋川の北岸で、海岸の林中に堅穴が約20か所に存在している。形は一辺の長さ5～10米で方形をなしている。形成年代は擦文文化期と考えられるが、或は縄文文化期にさかのぼるものも混じる可能性がある。本遺跡は景観もよく、比較的完全な状態であるので、保存することが望ましい。」とされ、堅穴群(B)については「堅穴が約30か所に存在している。形は一辺の長さ5～10米で方形をなしている。おそらく形成年代は擦文文化期と推定される」と記載され、後述の調査要約のなかでは「遺跡全般の測量図の作成が必要と認められた遺跡」とされた5か所の遺跡のひとつとして列記されている。

こうした一連の調査によって遺跡の重要性が認識されることとなり、昭和43年7月には興部町長から北海道教育委員会委員長宛て北海道文化財指定申請書が提出され、昭和43年12月18日に興部豊野堅穴群(A)と共に道史跡「興部豊野堅穴住居跡」として指定された。

イ. 史跡指定範囲と包蔵地範囲の齟齬

令和2年度の興部豊野堅穴群(A)の報告書作成の際、堅穴群(B)の史跡指定範囲と埋蔵文化財包蔵地の周知資料に示された位置に齟齬があることが分かった。これを踏まえて北海道教育庁生涯学習推進局（以下道教委とする）文化財・博物館課は令和3年10月13日に堅穴群(B)の現地調査を行った。結果堅穴の実際の分布域は、史跡指定範囲から約100m南東にずれていることが確認された。さらに課題として、①河川敷地との境界の確認、②不明瞭な堅穴の時期や性格の確認、③沢の北側の史跡指定範囲を包蔵地に含めるかどうかについては、今後詳細な測量や発掘調査が必要とされた。

ウ. 重要遺跡確認調査

令和4年8月19日、道教委文化財・博物館課長より、令和4～8年度の重要遺跡確認調査実施要領が示された。興部豊野堅穴群(B)については、(A)に引き続いて調査対象とすることとされ、具体的には、範囲内容を把握し、図上の指定範囲との齟齬を解決することが目的であり、(a)遺跡の分布範囲を地籍図へ位置づけ、国土座標値等を取得する。(b)堅穴を詳細に測量し、平面・断面形態、付属施設の有無等の属性データを記録する。(c)必要に応じて発掘調査等を実施する。の3点を目標として指示された。令和4年度はこれに基づき、堅穴とその分布範囲の測量調査を行った。調査の結果26か所の堅穴の座標値を得た。分布範囲は史跡指定範囲を100m北東方向に移動させ、30°時計回りに回転させるとほぼ合致することがわかった。堅穴は形状から3種に区分した。擦文文化期の堅穴住居である可能性が高いA種（12か所）、その他遺構の可能性のあるものB種（4か所）、遺構である可能性が低いC種（10か所）である。調査結果は重要遺跡確認調査報告書第18集にまとめている。令和5年度はこれを踏まえ、発掘調査を行った。

(4) 調査の経過

本調査は、「令和4～8年度重要遺跡確認調査実施要領」に基づき、令和5年5月8日に道教委文

化財・博物館課との協議を経て計画した。

現地調査は準備期間を含め、令和5年10月11日（水）～11月1日（水）の間、16日間で実施した。

調査に先行して10月11日～13日には調査予定堅穴周辺の合計約1,200㎡の草刈を興部町高齢者事業団に、基準点測量と基準方眼杭の設置を株式会社シン技術コンサルに委託して行った。調査員は11日から現地に赴き、環境整備や作業準備の後、調査を開始した。

本調査の体制は調査員2名・作業員6名で、調査内容は発掘調査、測量調査、写真撮影である。調査にあたっては地権者の佐藤克宏氏、興部町教育委員会（以下町教委とする）に多大な協力をいただいた。

調査終了後の11月11日（土）には町教委の協力のもと、興部町での4年間にわたる調査成果と遺物紹介を「調査成果報告会」として興部町中央公民館で実施した。町民21名が参加している。

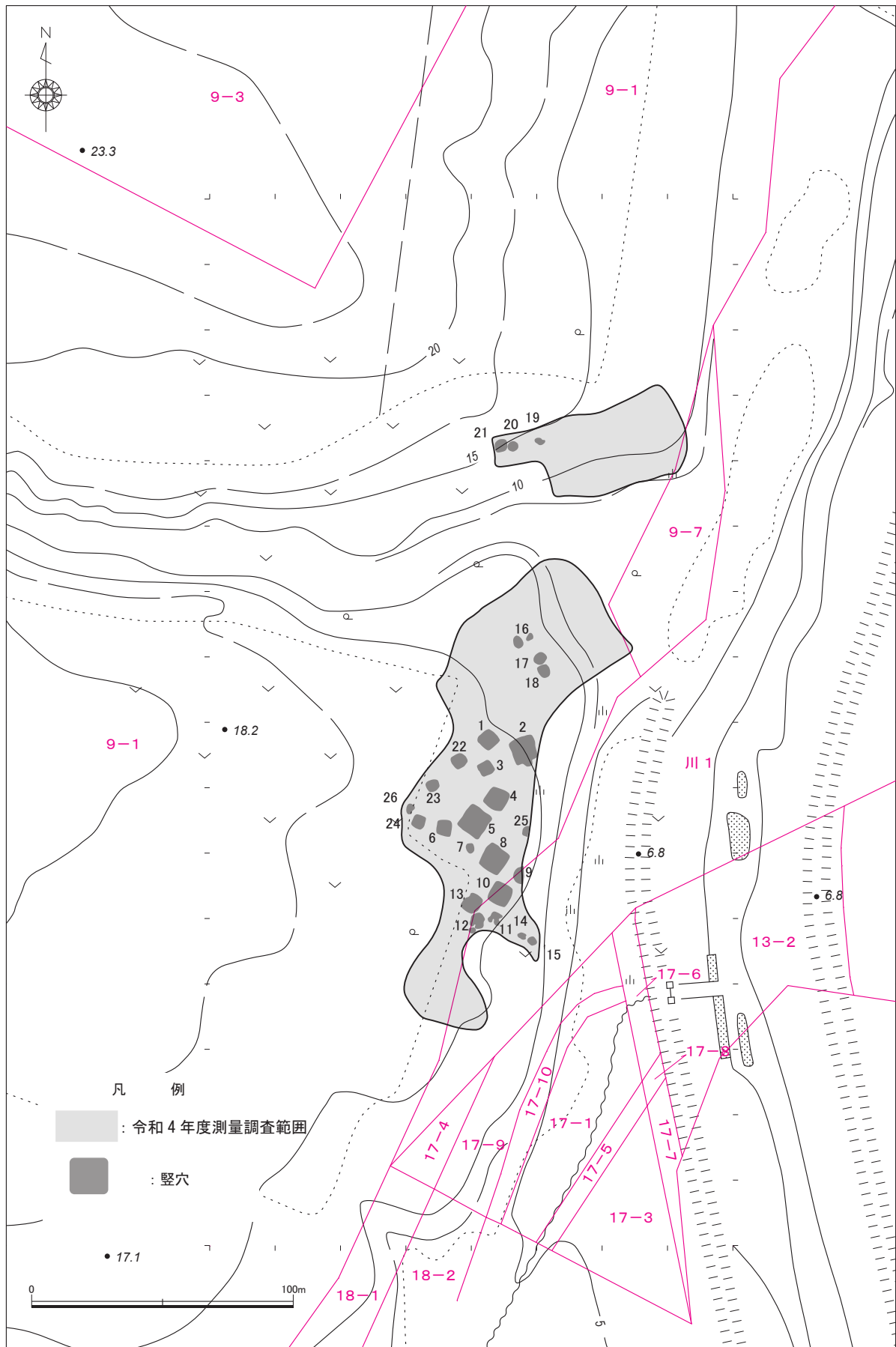
（5）調査結果の概要

令和4年度の測量調査により堅穴は26か所確認された。その分布は沢を挟んで2か所に分かれ、北側に3か所、南側に23か所が位置している。北側の3か所が全て小規模で斜面に位置するのに対し、南側は様々な大きさの堅穴が標高14～15mの平坦地に密集して確認される。南側23か所のうち擦文文化期の堅穴と推定される堅穴A種は約半数の12か所を占める。今年度の調査は26か所の中から、堅穴A種の2か所と、先述した遺構である可能性が低い堅穴C種8か所の計10か所について、トレンチによる発掘調査を行った。A種についてはその時期、規模、構造、重複関係を、C種についてはその実態を確認することを目的としており、調査結果を踏まえた堅穴分布範囲の確定を目指すものである。

調査の結果、C種8か所のうち北側分布域の3か所と、南側分布域の沢に向かう斜面に位置する3か所の計6か所の堅穴は、対となる近代の炭窯2基とその付属施設であることが分かった。堆積状況、規模や標高や配置がよく似ており、同時期に営まれたと想定される。残りのC種2か所は南側分布域の最南端に位置する。1か所はその実態を解明するに至らなかったが、1か所は全長3m程度の小規模な堅穴住居であることが分かった。一方で、A種とした2か所の堅穴は、ともに南東側にカマドのある堅穴住居で、出土遺物から擦文文化期であること、掘上げ土の切りあいから重複関係にあることも確認できた。都合堅穴住居は3軒となった。いずれも北西-南東方向に長軸があり、カマドを南東側に設ける擦文文化期の堅穴住居であることがわかった。

表Ⅱ-1 調査結果一覧

堅穴番号	規模 長軸×短軸/深さ(m)	埋没規模 長軸×短軸/深さ(m)	遺構名	時期	特徴
4	7.7×7.2/0.6	9.8×8.0/0.8	堅穴住居	擦文文化期	南東カマド・炭化材検出・有意の礫片出土 堅穴5より古い
5	9.8×9.5/0.8	10.0×9.9/0.9	堅穴住居	擦文文化期	南東カマド・炭化材検出 堅穴4より新しい
14	2.1×-/0.4	3.3×2.2/0.3	不明	不明	-
15	3.3×-/0.4	3.2×2.7/0.2	堅穴住居	擦文文化期	南東カマド・小型住居
16	-×-×/0.4	4.6×3.3/0.5	炭窯付属施設	近代	床面平坦、片側開口
17	-×-×/1.4	4.8×4.1/0.8	炭窯	近代	炭化材・焼成砂利出土
18	-	4.8×4.1/0.6	炭窯付属施設?	近代?	片側開口
19	-×-×/0.8	3.6×2.3/0.3	炭窯付属施設?	近代?	覆土に焼土粒・炭化材
20	-×-×/2.2	3.8×3.5/1.0	炭窯	近代	炭化材・焼成砂利出土
21	-×-×/1.2	4.6×4.5/0.6	炭窯付属施設	近代	床面平坦



図Ⅱ-4 令和4年度調査範囲と地籍図上の堅穴分布
(国土地理院発行の国土基本図1/5000を使用して作成した)

2 遺跡周辺の環境

(1) 遺跡の立地（図Ⅱ-5）

遺跡はオホーツク海に面した興部町北部、「豊野」地区に所在し、町の中心市街地「興部」地区から南東約4kmに位置する。興部町は面積362.54km²の酪農を主産業とする町で、オホーツク総合振興局管内の北部に位置し、北に雄武町、南に紋別市、滝上町、西に西興部村が隣接している。

「豊野」地区は「興部」地区の東に隣接し、瑠椥川^{るろちがわ}流域の上流から河口に広がる地域である。町内の地形概況は、町界西縁のポロヌプリ岳（標高835.4m）や蘗岳^{うつつだけ}（標高818.3m）などに向かう広い山麓緩斜面とそれに続く段丘が主であり、海岸には砂浜が見られる。主な河川は北から興部川、藻興部川^{も おこっぺ がわ}、瑠椥川、沙留川^{さるるがわ}、思沙留川^{おもさるるがわ}があり、南西から北東方向のオホーツク海に向けて流れる。また、河口が海岸砂丘に阻まれて、蛇行し、沼沢地化するのも特徴で、かつて興部川と藻興部川が河口部で合流していたことが、町名「おこっぺ」（オウコッペ：アイヌ語で川尻の合流しているところ）の由来になっている。

遺跡はオホーツク海から約800m内陸、瑠椥川の左岸にあり、南西方向から海に向かって伸びる低平な台地の東縁に所在する。遺跡付近の地形は平坦な馬の背状で、極めて緩やかに海へ向かって標高を減じている。台地東縁には瑠椥川が、西縁には藻興部川が流れ、ともに蛇行して流下しオホーツク海に注いでいる。なお、瑠椥川約600m下流の台地先端には豊野堅穴群(A)が位置している。

遺跡付近は瑠椥川の攻撃斜面上にあたり、川との比高は高いところで7～8mとなっている。台地は無数の侵食沢が刻まれており、遺跡は長さ約300mの大きな沢により2か所に分かれる。地形は沢北側が斜面であり、南側は台地平坦面と沢に向かう比較的緩やかな斜面で構成される。沢の沢底は低湿地となっており、雨天時には水流が認められる。この沢は農地造成時に上流部を埋めているとの情報を地権者から得ており、遺跡形成時にはさらに水量があった可能性もある。

(2) 周辺の遺跡（図Ⅱ-6・7）

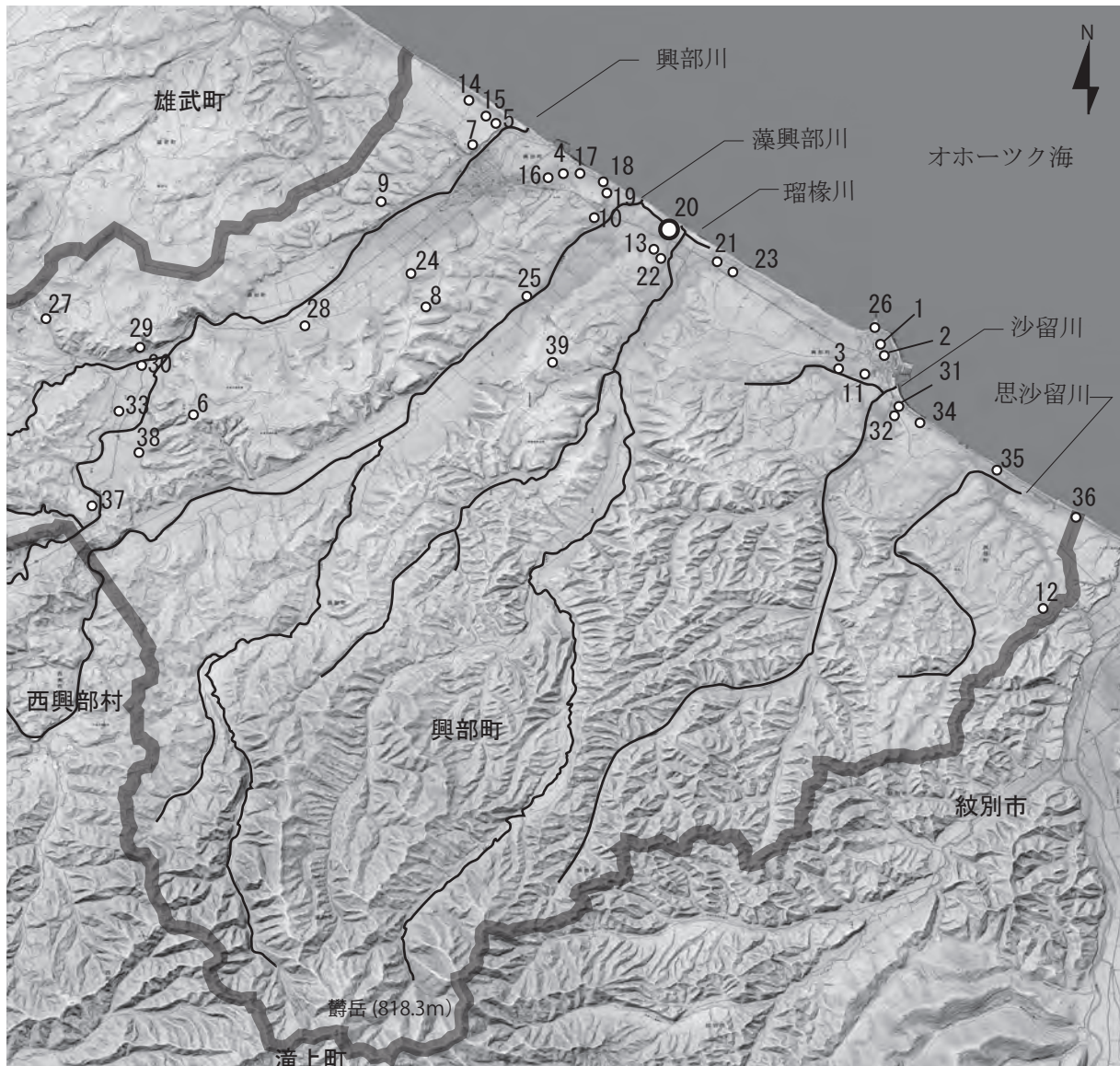
町内の埋蔵文化財包蔵地は39か所が確認されている。このうち紋別市との境に位置するオムサロ台地堅穴群と、興部豊野堅穴群(A)および興部豊野堅穴群(B)が「興部豊野堅穴住居跡」の名称で、道の史跡に指定されている。

遺跡の分布は海岸沿いに主に認められ、特に興部川、藻興部川、瑠椥川の河口付近に多い。また「沙留」地区にも集中が見られ、沙留遺跡や沙留岬遺跡など縄文文化や擦文文化、オホーツク文化を含む時期の8か所の遺跡が確認されている。丘陵地域では興部川上流の「宇津」地区に集中が見られ、宇津1・2遺跡など旧石器時代の遺跡が知られている。

興部豊野堅穴群(B)の近隣の遺跡には、瑠椥川の600m下流の河口付近に道指定史跡興部豊野堅穴群(A)がある。北西約500mには豊野6遺跡がある。瑠椥川を挟んだ対岸にあたる南東方向約1kmには豊野1遺跡がある。豊野1遺跡は1989年に興部町教育委員会により発掘調査が行われ、縄文時代中期の遺構、遺物、擦文文化期の遺物が出土している。また、藻興部川を挟んだ対岸の西方向1.8kmには秋里1・2・4遺跡がある。



図Ⅱ-5 遺跡の位置と周辺の地形
(国土地理院電子地形図25000、北海道教育委員会HP「北の遺跡案内」を使用して作成)



※この図は北海道教育委員会ホームページ「北の遺跡案内」、国土地理院地図及びカシミール3Dを用いて作成した。

- | | | | |
|-------------|----------------|-----------|----------------|
| 1 沙留遺跡 | 2 沙留神社遺跡 | 3 沙留川2遺跡 | 4 熊の沢遺跡 |
| 5 喜楽町遺跡 | 6 三井山遺跡 | 7 興部神社遺跡 | 8 北興遺跡 |
| 9 天竺の沢遺跡 | 10 秋里2遺跡 | 11 沙留川1遺跡 | 12 富丘1遺跡 |
| 13 豊野6遺跡 | 14 喜楽町2遺跡 | 15 喜楽町3遺跡 | 16 旭ヶ丘遺跡 |
| 17 オウコッペ1遺跡 | 18 秋里1遺跡 | 19 秋里4遺跡 | 20 興部豊野竪穴群 (A) |
| 21 豊野1遺跡 | 22 興部豊野竪穴群 (B) | 23 豊野2遺跡 | 24 北興2遺跡 |
| 25 秋里3遺跡 | 26 沙留岬遺跡 | 27 宇津3遺跡 | 28 北興3遺跡 |
| 29 宇津2遺跡 | 30 宇津1遺跡 | 31 沙留川口遺跡 | 32 沙留川口2遺跡 |
| 33 宇津4遺跡 | 34 オンネナイ遺跡 | 35 富丘2遺跡 | 36 オムサロ台地竪穴群 |
| 37 パンケ遺跡 | 38 宇津5遺跡 | 39 豊野5遺跡 | |

0 2 4 6km
1 : 150000

図Ⅱ-6 周辺の遺跡



図Ⅱ-7 興部豊野竪穴群(A)と(B)の位置

(興部町都市計画図及び道指定史跡関連文書、埋蔵文化財包蔵地カード、道教委文化財博物館課提供資料をもとに作成した)

3 調査の方法

(1) 基準点測量と基準方眼杭の打設

基準点測量作業は株式会社シン技術コンサルに委託し、昨年度打設した基準点の点検測量、さらに新たに基準方眼杭22か所の打設、水準測量を実施した。基準点は8か所、GNSS測量による3級2か所(301・302)、4級6か所(401～406)である。全杭の座標値(世界測地系Ⅻ系)は次のとおりである。

〈基準点測量〉(3級)

301 (X=50685.896 Y=72975.647) 302 (X=50941.996 Y=73070.214)

〈基準点測量〉(4級)

401 (X=50747.953 Y=72995.328) 402 (X=50788.123 Y=73003.609)

403 (X=50824.678 Y=73015.481) 404 (X=50848.442 Y=73037.713)

405 (X=50901.322 Y=73124.450) 406 (X=50919.747 Y=73073.273)

〈基準方眼杭〉

杭の名称は「東西ライン-南北ライン」で表され、当該名称は基準杭北東側の調査区(グリッド)の名称となっている(なお前報告18集において「南北ライン-東西ライン」と記されグリッド表記に混乱があった。ここに訂正する)

19-31 (X=50755.000 Y=72995.000) 19-33 (X=50765.000 Y=72995.000)

21-31 (X=50755.000 Y=73005.000) 21-33 (X=50765.000 Y=73005.000)

22-46 (X=50830.000 Y=73010.000) 22-61 (X=50905.000 Y=73010.000)

23-33 (X=50765.000 Y=73015.000) 23-35 (X=50775.000 Y=73015.000)

23-44 (X=50820.000 Y=73015.000) 23-46 (X=50830.000 Y=73015.000)

23-62 (X=50910.000 Y=73015.000) 24-23 (X=50715.000 Y=73020.000)

24-24 (X=50720.000 Y=73020.000) 24-61 (X=50905.000 Y=73020.000)

24-62 (X=50910.000 Y=73020.000) 25-23 (X=50715.000 Y=73025.000)

25-24 (X=50720.000 Y=73025.000) 25-44 (X=50820.000 Y=73025.000)

25-46 (X=50830.000 Y=73025.000) 25-61 (X=50905.000 Y=73025.000)

25-62 (X=50910.000 Y=73025.000)

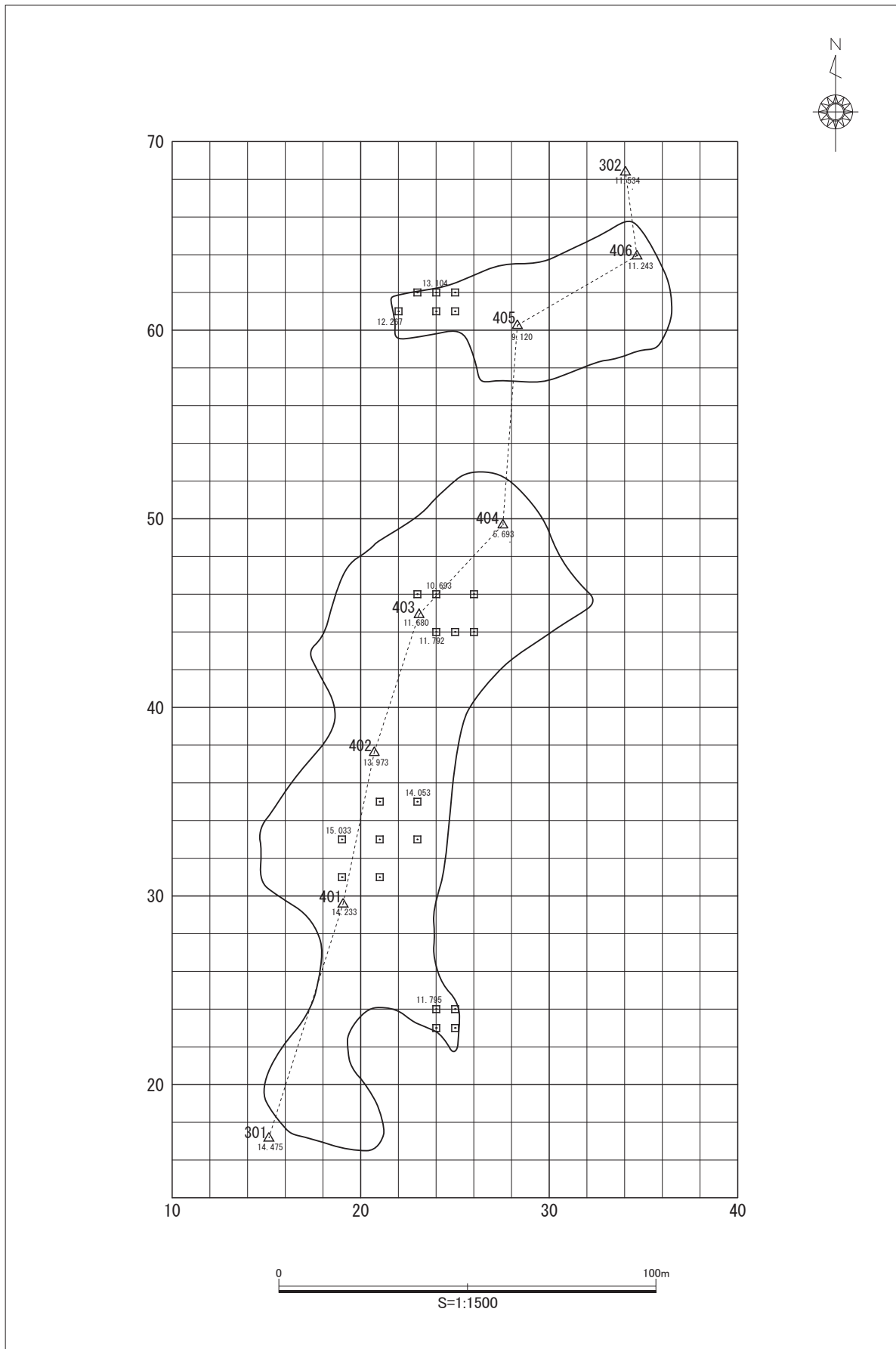
(2) 発掘調査

ア. 調査対象について

今年度の調査では、26か所の竪穴のうち擦文文化期の竪穴とみられる竪穴A種についての時期、規模、重複関係の調査、加えて遺構である可能性が低い竪穴C種の確認調査を行い、竪穴群の分布範囲の確定を主眼として調査を行った。調査対象は、A種から竪穴4、竪穴5。C種から、竪穴14から竪穴21までの都合10か所である。

イ. トレンチの設定

発掘調査の方法は、令和3年度豊野竪穴群(A)の調査に準じたトレンチ調査とした。竪穴A種の調査においては、図Ⅱ-9のように竪穴の軸に合わせた十字に土層観察ベルトを想定し、ベルトに沿ってトレンチを設定した。ベルトとトレンチの幅はともに50cmとした。さらに掘上げ土の切りあいを確認するため、隣り合うトレンチを延長して連続している。トレンチの呼称は、南東から時計回りにTR-1～3とし、L字となるTR-3はA・Bに細分した。竪穴C種のトレンチは、概ね長軸に沿っ



図Ⅱ-8 測量杭配置図

て1本のトレンチとし、北東のオホツク海に向いた状態で中心から二分し、左をA区、右をB区とした。

ウ. 竪穴調査

調査の結果竪穴が古代の遺構であった場合床面までとし、それ以外は基本的に基盤層となる黄褐色土まで掘り下げることとした。調査はスコップで笹の根が張る表土（I層）を除去した後、移植ゴテを使って掘り下げた。遺物が出土した場合、遺構に伴うとみられるものは出土地点を記録し、伴わないと判断されるものはトレンチ毎に層位を記録して取り上げた。調査後は土層断面図を作成した。記

載にあたり『新版標準土色帳』（農林水産省・財団法人日本色彩研究所2002）を使って色調を記録した。埋め戻しは竪穴ごとに土を戻し、最後に表土を敷いて原状復帰を行った。

エ. 写真撮影

現地での写真撮影は菊池が担当し、デジタルカメラ（ボディ：Nikon D750、レンズ：AF-S NIKKOR 24-120mm f/4G ED VR）を使用した。

オ. フローテーション選別

竪穴住居跡のカマドに関連する土壌を採取し、フローテーション選別（浮遊選別）を行った。使用した装置はPROJECT SEEDS MODEL TYPE-1。浮遊物は2.00mmおよび0.425mm、沈殿物は1.41mm目の篩により回収した。なお、比較試料として令和3年度興部豊野竪穴群(A)の採取試料についても、興部町教育委員会より借用し同様に作業を行った。種別の鑑定は行っていないが、根等の混入物を除去し、種子とみられる炭化物の選別を行っている。

(3) 遺物整理

ア. 一次整理

水洗・注記の後、分類して台帳作成した。注記は以下のように行った。竪穴は(T)とした。

トヨB	T 4	床	3
遺跡名	遺構名	層位	遺物番号

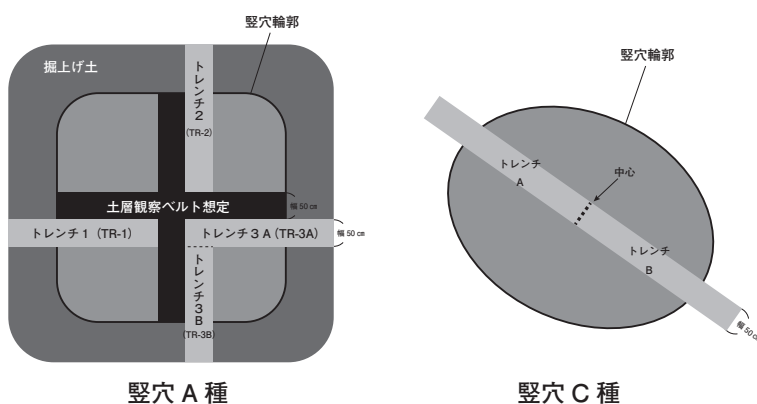
イ. 二次整理

出土遺物の接合、実測・拓本・写真撮影・詳細観察を行った。

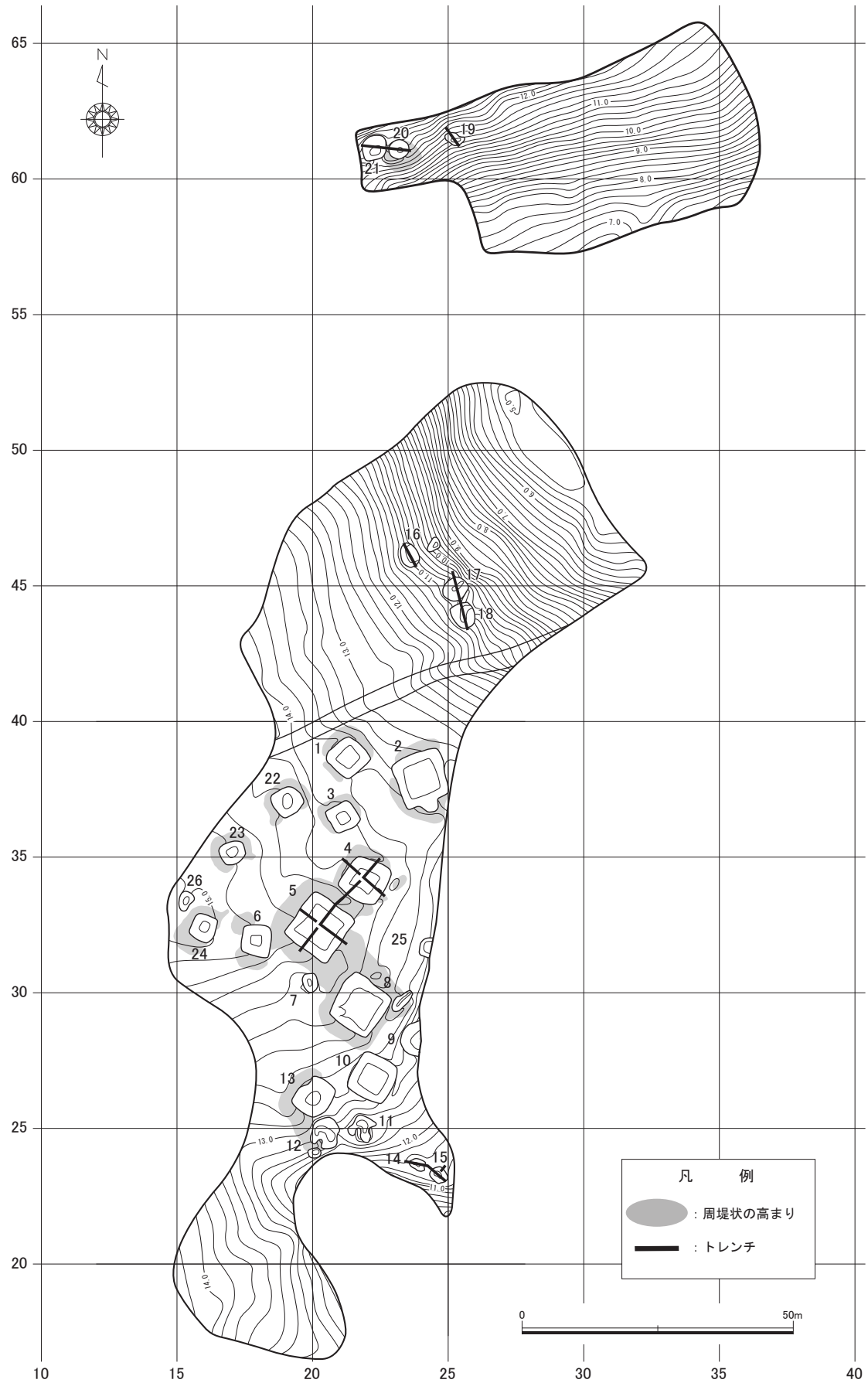
ウ. 遺物の分類

【土器】土器は擦文文化期に相当するもののみが出土しており、細分は行わなかった。

【石器】石器はたたき石、フレイク、有意の礫・礫片、礫・礫片が出土している。



図II-9 調査トレンチの設定方法



図Ⅱ-10 堅穴と調査トレンチ位置図

4 調査結果

(1) 基本土層 (図Ⅱ-11)

基本土層は興部豊野竪穴群(A)の調査を概ね踏襲して作成した。色調等特徴の記載にあたっては、遺構による影響が少ないとみられる竪穴4・5の掘上げ土が確認された部分で行った。掘上げ土はⅡ層中に形成される。なお、竪穴群(A)でⅡ層中に確認された火山灰は、本調査では認められなかった。

Ⅰ層	10YR	4/1	褐灰色	粘性なし	しまりなし	(植生により細分した部分もある)
Ⅱ層	10YR	3/2	黒褐色	粘性なし	ややしまりあり	
Ⅲ層	10YR	2/3	黒褐色	粘性なし	ややしまりあり	
Ⅳ層	10YR	4/4	褐色	粘性あり	しまりあり	
Ⅴ層	10YR	5/8	黄褐色	粘性あり	しまりあり	
V'層	(Ⅴ層に砂礫が多く混じる)					

(2) 発掘調査

発掘調査は竪穴10か所について行った。以下番号順に調査結果を記す。

竪穴4 (図Ⅱ-11、16 図版1、2、6)

位置 22、23-34、35区

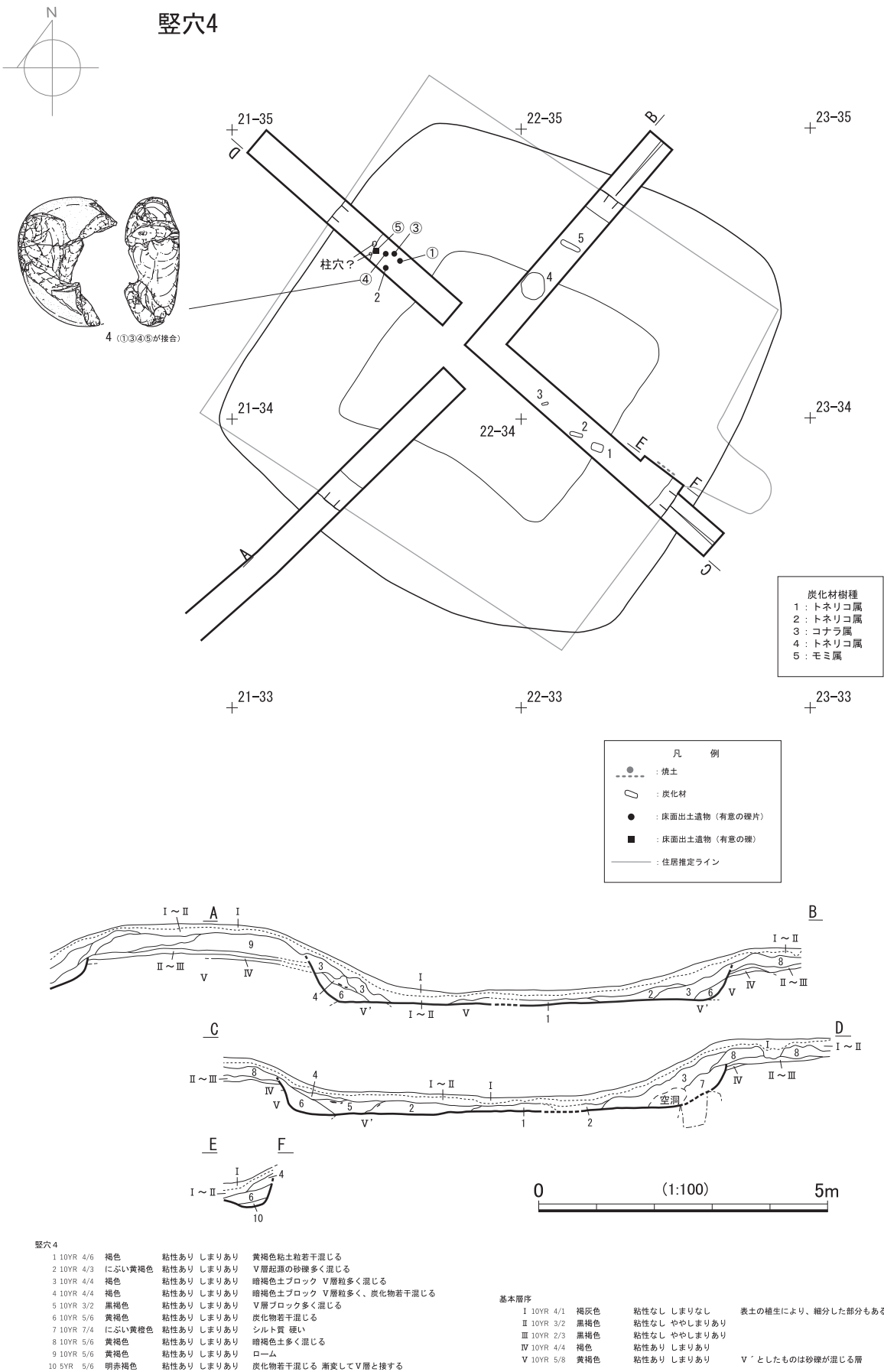
推定規模 7.7×7.2/0.6m (埋没規模9.8×8.0/0.8m) **平面形態** 方形

調査 竪穴分布域のほぼ中央に位置する。笹の根が繁茂する表土とその下位の黒褐色土(Ⅰ～Ⅱ層)を除去すると、黄褐色土が混じる黒褐色～褐色土、いわゆる汚れた土を確認した。竪穴中央部の堆積は概ね10cm以下で浅く、2層とした床面直上の堆積にはV'層起源とみられる円礫が混じる。堆積は壁に近づくに従い厚くなる傾向があった。3層は屋根土もしくは掘上げ土の流入とみられるが、南東側には検出されない。6層は壁際床面に堆積する。8、9層は本遺構の掘上げ土とみられる。竪穴5と接する南西方向では最大層厚で40cmである。全体としてほぼそした黄褐色粘土で、竪穴5の掘上げ土に覆われている。竪穴5より古いとした測量結果と整合的である。トレンチ1の北西壁には白色粘土の分布が認められた。床面に接する不自然な空洞を伴っていたため、これをカマド構造物の一部の可能性があるものとして調査を行った。しかし、白粘土は床下にさらに広がっており、結果基盤層(V層)の一部と判断した。カマドの探索のためトレンチ3B北東側の壁際付近を1mの幅で延長して掘削した。10cmのところで床面に明瞭な焼土を確認し、カマドは南東方向に構築されていると判断した。

住居構造 調査の結果、一辺が7.5m程度のほぼ正方形で、壁は四方で明瞭に立ち上がる。ただし白粘土が検出された北西方向は7層を壁としているかもしれない。床面は平坦である。カマドは南東方向に作出され、中心からやや北によった位置にあるとみられる。カマド想定部分はちょうど周堤が途切れており、測量結果とも整合的である。柱穴は確認できなかった。

出土遺物 トレンチ3B拡張部において検出された焼土の上位(6層)から擦文土器の底部が出土した(図Ⅱ-16-1)。土器は二次焼成を受けており、カマドに関連するものとみられる。床面からの出土遺物は他に、トレンチ2の北西壁付近で被熱した有意の礫が出土している(同図Ⅱ-4、5)。うち1点は破片4点が接合するものである(4)。このほかⅡ層からV'層を起源とする礫が8点出土している。また2、3層から炭化材が出土した。残存状況は悪く断片的な木片が認められる状況であった。樹種は5が針葉樹のモミ属、他は広葉樹で、3がコナラ属、1、2、4は全てトネリコ属であった。

時期 住居構造と出土遺物から、擦文文化期とみられる。



図Ⅱ-11 堅穴4

竪穴5（図Ⅱ-12・16 図版2、3、6）

位置 20～22-32～34区

推定規模 9.8×9.5/0.8m（埋没規模10.0×9.9/0.9m） **平面形態** 方形

調査 竪穴分布域のほぼ中央に位置する。測量結果から北東側に接する竪穴4より新しいと判断している。自然堆積層である笹の根が繁茂する表土とその下位の黒褐色土（Ⅰ～Ⅱ層）を除去すると、黄褐色土が混じる黒褐色～褐色土、いわゆる汚れた土を確認した。竪穴の内側で円礫が多数出土していた。人為的配列の可能性を考慮し状況確認のため露出させた。しかし、敷き詰められた様子や、他に出土遺物もなかったため、形状から石器の可能性のあるもののみ出土遺物として取り上げた。Ⅱ層以下の堆積は、南東方向（TR3B）とそれ以外の方向で異なる。南東方向は堆積中に細かい炭化物を伴うやや白色の強い黄褐色土の落ち込みが認められた。落ち込みは半円を呈して南側のトレンチ壁面に延びており、形状からカマド煙道部分とみられた。堆積を掘り下げると焼土を確認し、火床と判断した。火床上位の堆積はフローテーションサンプルを採取している。南東方向以外においては、攪拌されたⅢ～Ⅴ層、汚れた土の厚い堆積が認められる。壁際の床に接して褐色～黄褐色土が堆積（4、6層）し、上位には流れ込みもしくは崩落したとみられる堆積（2～7層）が認められる。堆積は竪穴4に比較しやや薄い。10層は本遺構の掘上げ土である。竪穴4の掘上げ土より上位に位置すると判断した。竪穴5のトレンチ2とトレンチ3Aにおいて、掘上げ土の下位に炭化物が共通して検出されていること、竪穴5の掘上げ土にのみ、竪穴5で多く出土するⅤ層起源礫が混じっていることによるものである。これを竪穴5の掘上げ土の特徴と判断した。測量調査結果と整合する。

住居構造 調査の結果、想定される構造は一辺が約10mのほぼ正方形で、壁は四方で明瞭に立ち上がる。床面はやや起伏があるが概ね平坦である。カマドは南東方向の中心軸上に作出される。柱穴等は検出していない。

出土遺物 カマドの上位にあたる6層上面から、甕口縁部片（図Ⅱ-16-3）が、6層中から黒曜石フレイク（同図-6）が出土している。このほか、フローテーションサンプルとした9層を洗浄中、甕口縁部片が出土している（同図-2）。このほかの出土遺物は、主としてⅡ層や1層の覆土中から、Ⅴ層を起源とする礫が114点出土している。また、壁際に堆積する4、6層から堆積中より炭化材が出土した。残りのよい部分では薄板状であった。材の概ねの方向を記録し取り上げた。樹種は全て広葉樹トネリコ属であった。

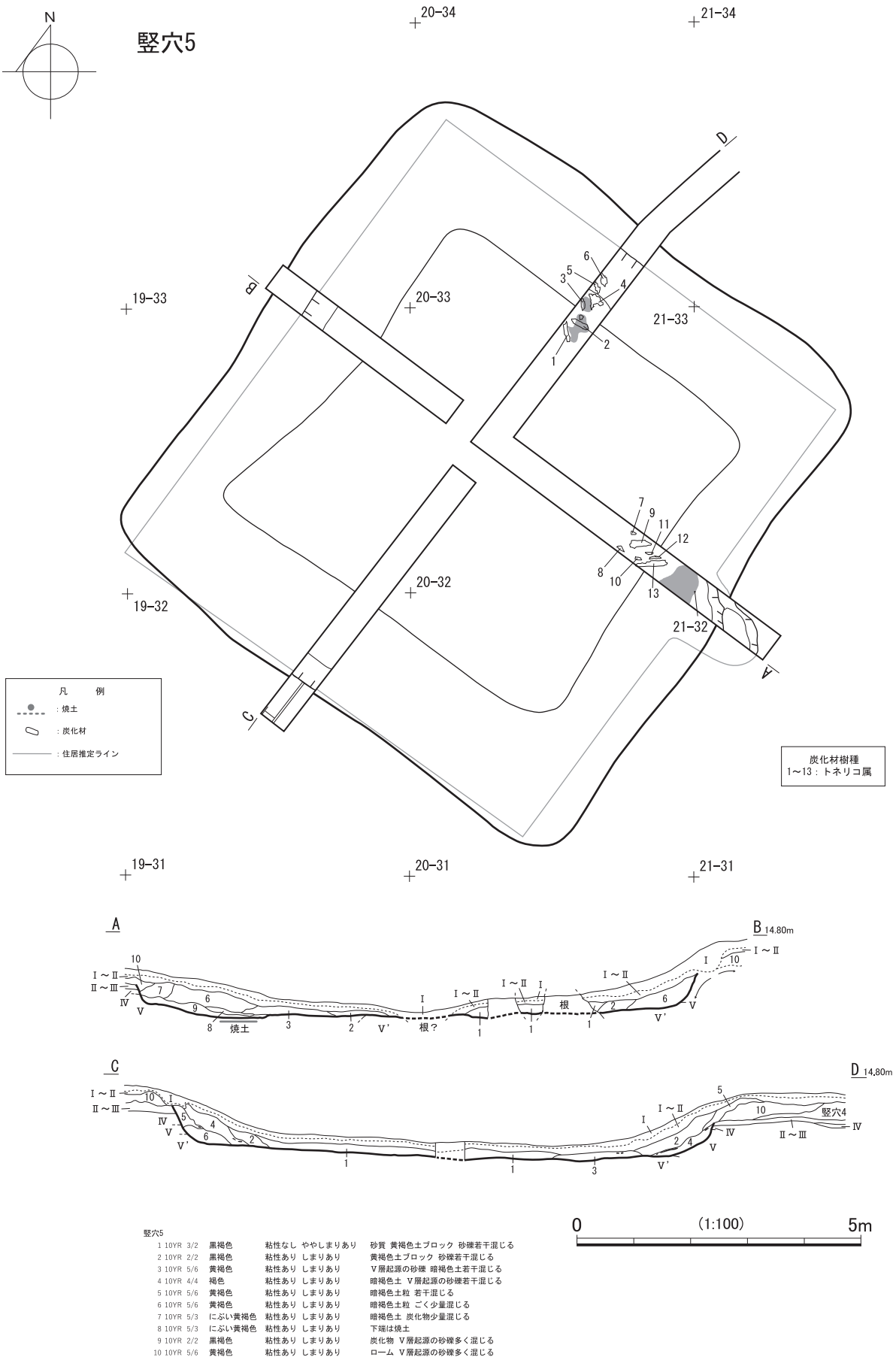
時期 住居構造と出土遺物から、擦文文化期とみられる。

竪穴14・15（図Ⅱ-13 図版4）

位置 24、25-24区

推定規模 14・2.1×-/0.4m（埋没規模3.3×2.2/0.3m） **平面形態** 14・不整形
15・3.3×-/0.4m（埋没規模3.2×2.7/0.2m） 15・楕円形

調査 竪穴分布域の南端に位置する。トレンチは両遺構の長軸に合わせ「く」の字に設定した。自然堆積層である笹の根が繁茂する表土とその下位の黒褐色土（Ⅰ～Ⅱ層）を除去すると、竪穴14では、凹凸のあるⅤ層が露出した。竪穴15では、黄褐色土ブロックとわずかに炭化物が混じる黒褐色土の落ち込みが認められた。落ち込みを掘削すると南東端の基盤層に焼土を確認した。このことから竪穴15は遺構の可能性が高くなったので、北東方向に直交するトレンチを追加してⅤ層まで掘り下げた。結果、壁の立ち上がりを確認し、竪穴15は竪穴住居と判断した。これを受けて竪穴14も同様の遺構ではと想定し改めて精査したが、住居であることを示す根拠をみつけることができなかった。

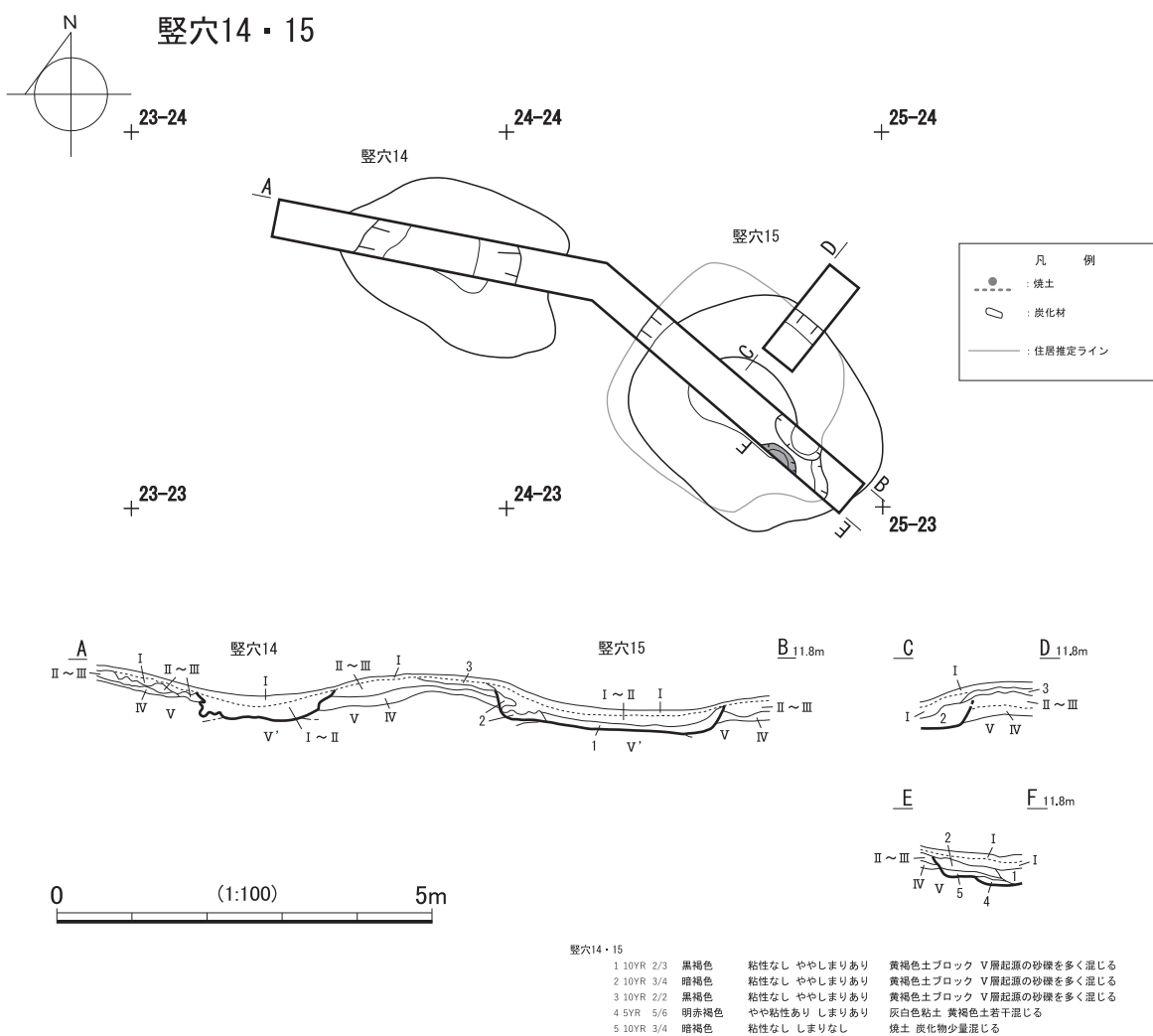


図Ⅱ-12 竪穴5

構 造 14・底面が凹凸のあるすり鉢状。掘り込み面はⅡ層上面付近とみられる。由来の不明な落ち込みである。成因としては伐根等が考えられる。15・南東方向にカマドが作られる全長2 m程度の方角を呈する小規模な竪穴住居とみられる。

出土遺物 Ⅴ層起源の礫が多く出土している。形状から石器の可能性のあるもののみ出土遺物とした。点数の内訳は、竪穴14は3点、15が7点である。

時 期 14は不明。15は構造から擦文文化期とみられる。



図Ⅱ-13 竪穴14・15

堅穴16・17・18 (図Ⅱ-14 図版4、5)**位 置** 22～25-44～47区

推定規模 16・-×-/0.4m (埋没規模4.6×3.3/0.5m) **平面形態** 16・楕円形
 17・-×-/1.4m (埋没規模4.8×4.1/0.8m) 17・楕円形
 18・- (埋没規模4.8×4.1/0.6m) 18・不整円形

調 査 堅穴集中域の北側斜面に位置する。堅穴は全て斜面側に開口する形状であったので、トレンチは等高線に平行し、中心を通る北西-南東を軸に設定した。堅穴17と18は接しており1本のトレンチとした。自然堆積層である笹の根が繁茂する表土(I層)を除去すると、堅穴16・18は10～20cmほどの掘削で基盤層であるV層が検出された。堅穴17はI層の下位に炭化物が混じる堆積が認められ、さらに掘り下げると焼成して黒変した砂利や炭化材が多量に出土した。出土物から炭窯が疑われた。確認のため、堅穴の中心部を掘り下げると、焼成粘土、炭化材、焼成して黒変した砂利が出土し、約70cm掘り下げたところで硬く締まった焼成砂利層に達した。炭窯の基底部とみられる。周囲を改めて観察すると、堅穴17の北東方向約3mの部分が、10×5m程の範囲で平坦となっている(図Ⅱ-14中の「平場」)。炭窯構築の際に造成したと判断される。

構 造 堅穴17は直径約4mの炭窯である。約4m北東にある堅穴16は床面がほぼ平坦に作出されており、資材等の置き場もしくは小屋状の構築物の痕跡ではないだろうか。堅穴18は表面を削られてはいるものの、堅穴17の影響で堅穴状に見えるだけかもしれない。北東側の平坦部も含め、炭窯に関連する一連の施設とみられる。

出土遺物 堅穴17の覆土から、たたき石が1点出土している。炭窯の構造材らしき焼成土塊を1点遺物として取り上げている。

時 期 不明であるが、近代のものとみられる。

堅穴19・20・21 (図Ⅱ-15 図版5)**位 置** 22～26-61、62区

推定規模 19・-×-/0.8m (埋没規模3.6×2.3/0.3m) **平面形態** 19・不整円形
 20・-×-/2.2m (埋没規模3.8×3.5/1.0m) 20・円形
 21・-×-/1.2m (埋没規模4.6×4.5/0.6m) 21・不整形

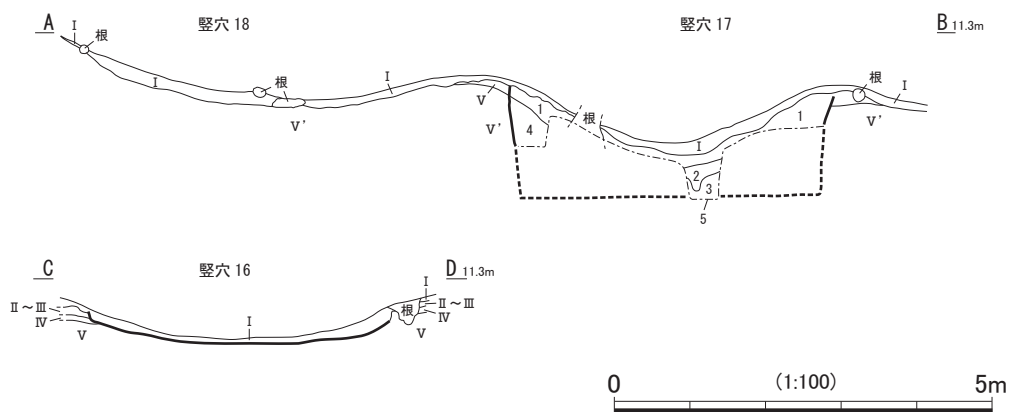
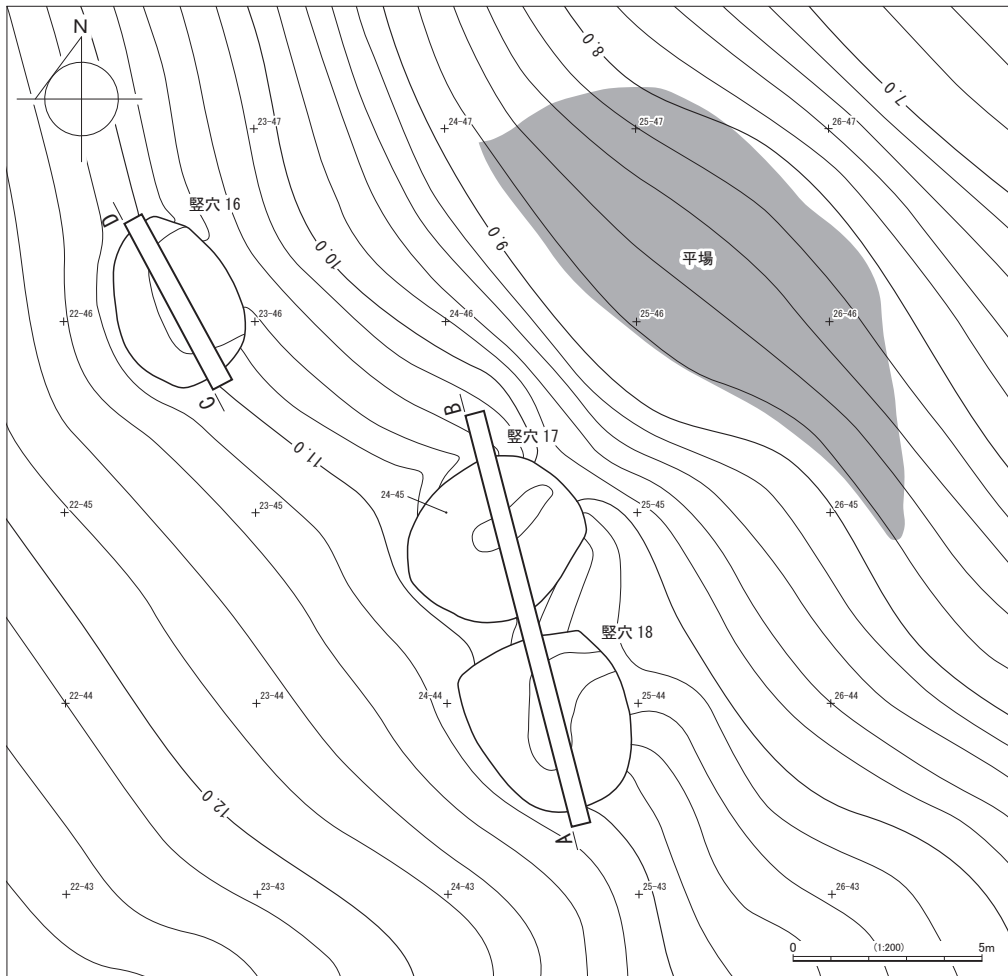
調 査 沢北側の斜面に位置する。トレンチの設定は、堅穴19が斜面に直交、堅穴20、21は東西方向に連続する1本とした。自然堆積層である笹の根が繁茂する表土(I層)を除去すると、堅穴19・21では10～20cmほどの掘削で炭化物、焼土粒子が混じる黒褐色土が検出された。堅穴20からは炭化物、V層起源の礫、灰白色粘土が混じる堆積を確認した。規模、構造の上で堅穴17と酷似しており、堅穴20も炭窯である可能性が高かった。確認のため、堅穴の中心部を掘り下げると、焼成粘土、炭化材、焼成して黒変した砂利が出土し、約60cm掘り下げたところで硬く締まった焼成砂利層に達した。炭窯の基底部とみられる。周囲を改めて観察すると、堅穴20の南側で、10×4m程の範囲が平坦となっている。炭窯構築の際に造成されたものとみられる。

構 造 堅穴20は直径約4mの炭窯である。約6m東にある堅穴19は覆土中に炭化物、焼土が確認されるが、人為的遺構かどうかはわからなかった。堅穴21の堆積状況も同様であるが、底面が平坦となっていることから、平場とした南東側の部分も含めて炭窯に関連するものとみられる。

出土遺物 焼成礫、炭化材以外の物は出土していない。

時 期 不明であるが、近代のものとみられる。

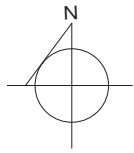
竪穴16・17・18



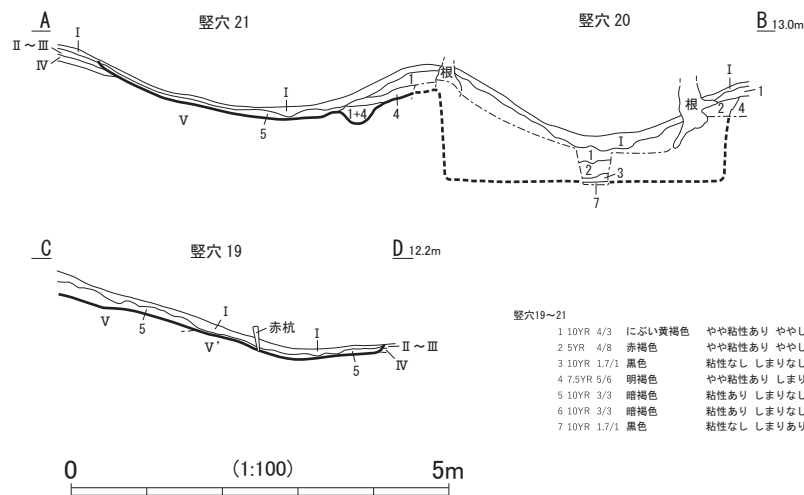
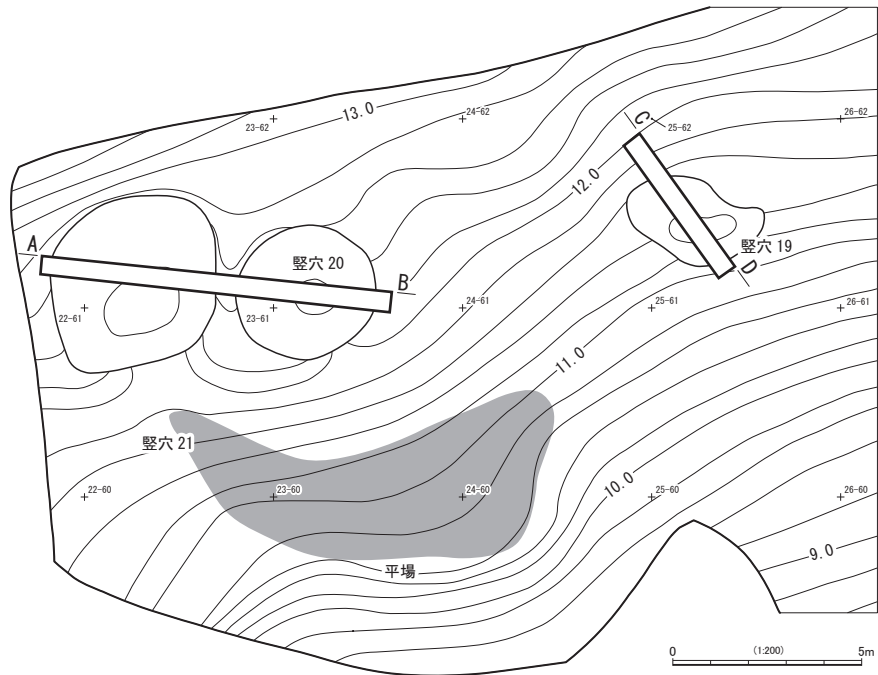
竪穴16～18

1 10YR 5/4	にぶい黄褐色	やや粘性あり	しまりあり	暗褐色土を多く、炭化物を少量混じる
2 5YR 4/6	赤褐色	やや粘性あり	しまりなし	炭化物 焼成土塊ブロックを多く混じる
3 5YR 5/2	灰褐色	やや粘性あり	しまりなし	炭化物 焼成土塊ブロックを多く混じる 灰層あり
4 10YR 2/2	黒褐色	粘性なし	しまりなし	炭化物 小砂利を多く混じる
5 10YR 2/2	黒褐色	粘性なし	しまりあり	炭化物 小砂利で構成される 硬く締まる

図Ⅱ-14 竪穴16・17・18



竪穴19・20・21



竪穴19～21

1 10YR 4/3	にぶい黄褐色	やや粘性あり	ややしまりあり	炭化物 灰白色粘土 V層起源の礫を多く混じる
2 5YR 4/8	赤褐色	やや粘性あり	ややしまりあり	炭化物 1、5層を多く混じる
3 10YR 1.7/1	黒色	粘性なし	しまりなし	炭化物 砂礫で構成される
4 7.5YR 5/6	明褐色	やや粘性あり	しまりなし	砂礫を若干混じる
5 10YR 3/3	暗褐色	粘性あり	しまりなし	焼土粒 炭化物をごく少量混じる
6 10YR 3/3	暗褐色	粘性あり	しまりなし	黄褐色土 砂礫を若干 炭化物をごく少量混じる
7 10YR 1.7/1	黒色	粘性なし	しまりあり	硬く締まった3層

図Ⅱ-15 竪穴19・20・21

(3) 出土遺物

出土遺物の詳細は表Ⅱ-2に示した。総点数は162点。うち143点を礫が占める。土器は擦文土器3点、石器等は8点で、内訳は有意の礫(片)が6点、フレイク、たたき石が各1点である。さらに焼成土塊8点を遺物として取り上げた。土器、石器についてはほぼ全て図化した。以下図化したものを説明する。

ア. 土器

1は竪穴4から出土した擦文土器の底部である。一部に擦痕が残るが二次焼成のためか表面が剥落する部分が多い。調整は丁寧で底面は平滑に仕上げられる。2、3は竪穴5から出土。2は甕口縁部小片。フローテーションサンプルから採取している。口縁下に2条の平行沈線、沈線間には斜位の刻みが施される。3はカマド上位の6層から出土した。甕もしくは高坏の口縁部である。無文で極めて丁寧に磨かれている。2のみが施文から時期が限定できる資料で、宇田川編年後期とみられる。

イ. 礫・石器

4、5は有意の礫。4は礫片4点が接合したもの。概ね半分ほどの破片が復元できた。無斑晶質玄武岩を素材とする。破面には同心円状のリングが認められ、打点も明瞭ではないので、被熱により破損したものとみられる。5も同様に、素材は微細な斜長石の斑晶が認められる無斑晶に近い緻密な安山岩である。被熱し表面にはじけがみられる。4、5はともに9×3～4cmの手触りのよい扁平礫で、いずれも床面から出土し被熱しており、錘等に利用された礫と考え「有意の礫」とした。6は竪穴5から出土したフレイク。黒曜石製である。7は竪穴17のⅡ層から出土したたたき石である。扁平な凝灰岩を素材とする。図の下側にやや弱い敲打痕が認められる。

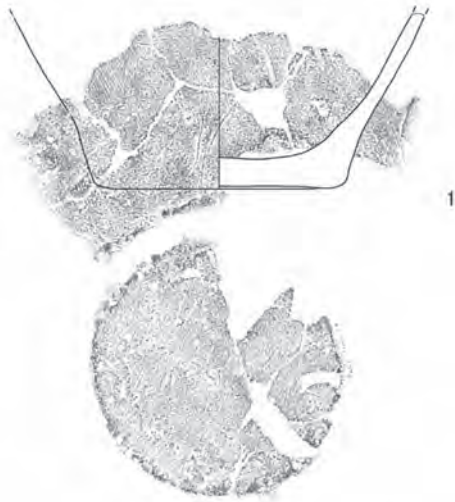
ウ. 参考資料(興部高等学校所蔵の土器と資料)

【掲載の経緯】

興部豊野竪穴群(B)の包蔵地カードには、出土遺物の項目に「土器(擦文・縄文・続縄文)、石器とあり、保管者として「興部高校」と記載されている。興部高等学校に確認したところ、調査時点では所在する考古遺物は出土地不明の復元土器1個体のみであるとのことであった。この復元土器は昨年興部高等学校から町教育委員会に移管されており、教育委員会で実見することができた。土器は続縄文式に相当するもので、包蔵地カードに記載される「続縄文土器」である可能性があった。しかし、高校にはこの土器に関する記録がなく、土器にも注記等は見当たらない状態であった。土器は石膏によって復元されているが、底部付近が経年により崩壊していた。豊野竪穴群(B)の出土遺物である可能性も捨てきれないため、補修して資料紹介することとした。

なお、この土器の由来について探索するため、北海道興部高等学校 相澤秀樹教頭に、卒業アルバム、生徒会の広報「オホーツク」に記載があるかについて調査のご協力をお願いした。結果、「考古学同好会」がかつて当校に存在しており、若干の遺物、写真等の記録類が現在も保管されていること、また昭和41、43、47、50(1966、68、72、75)年の卒業アルバムには、同好会のメンバーとともに、この土器が写っていることがわかった。遺物とさらなる資料の探索を当校に出向き行ったが、この土器の詳細について、また竪穴群(B)の出土遺物についてはこれ以上の情報を得ることができなかった。ただし、記録類の中にこれまで未発見の竪穴群(B)の資料及び写真を発見したので後述する。この情報探索に関して、国立アイヌ民族博物館 田村将人氏から、探索の手がかりとなる情報を頂いた。興部高等学校 山崎融一教諭には探索にご協力頂き、興部町立図書館 大井重美氏には当地の新聞「西紋新聞」の記事探索、また有益な情報を頂いた。記して感謝申し上げる。

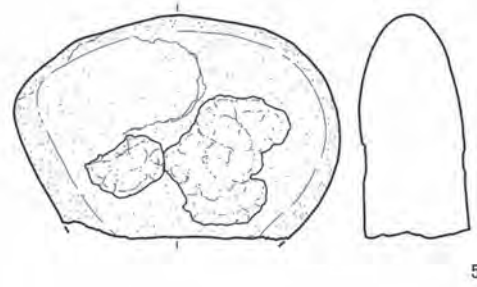
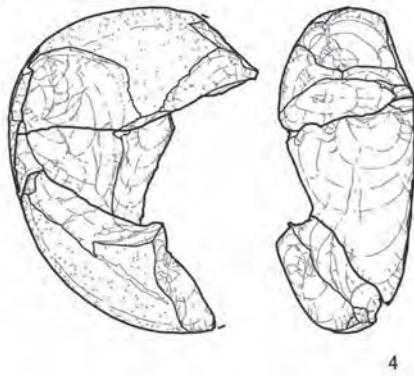
竪穴4



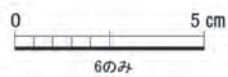
竪穴5



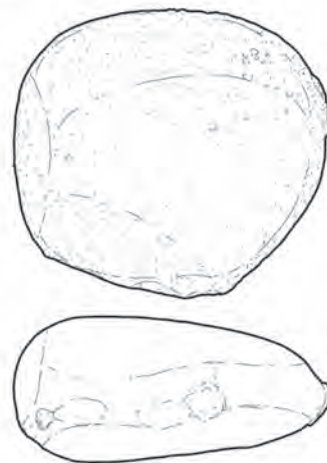
竪穴4



竪穴5



竪穴17



図Ⅱ-16 出土遺物



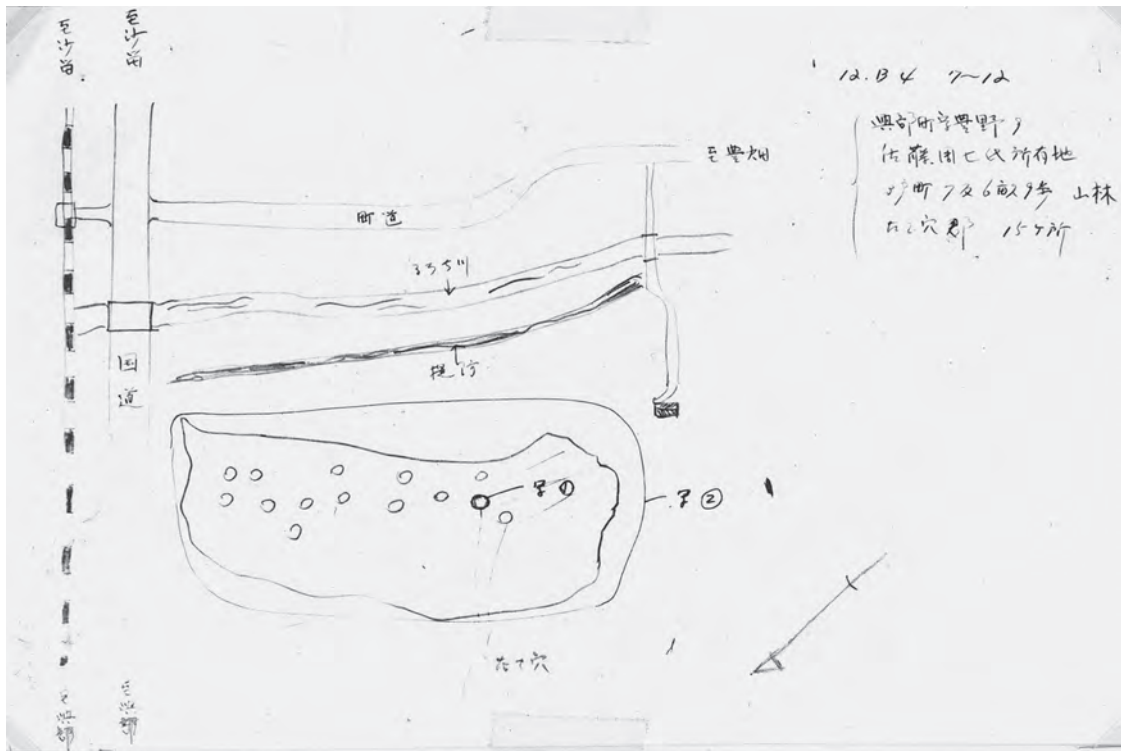
図Ⅱ-17 参考資料（興部高等学校所蔵資料）

【土器の諸特徴】

口縁の一部を欠くが、概ね8割ほどの破片が残存する深鉢である。高さ48.9、最大幅は39.0cmと大型で、最大幅は胴部中央よりやや上にある。胴部最大幅付近に1対の、最大幅から口縁までの中間点に1対の小ぶりの貼り付けがあり、貼り付けは緩やかな弧を描く貼付帯により連結されている。口唇はやや丸みを帯びる。地文はやや条の間隔があくLR斜行縄文。器面全体に施される。口縁部文様帯には7条、口唇内面側には1条の縄線がつけられている。文様帯縄線の下端と貼付帯上には縄端の圧痕が連続してつけられ、口縁にはIOの突瘤文がめぐらされている。施文は地文が最も優先される。粘土紐の単位が特に下半で明瞭であり、外形接合である。施文順、器形、突瘤文の存在から、続縄文時代前期、宇津内ⅡaⅡ式（熊本2018）とみられる。

【堅穴群(B)の図及び写真について】

興部高等学校に所蔵される堅穴群(B)に係る資料は、簡易測量図1枚と、写真3枚である。図Ⅱ-18は遺跡付近の簡易測量図となっており、堅穴15か所が確認されていること等が記載されている。図中の堅穴分布は測量結果とはかなり異なるが、北東端が瑠椋川の堤防に近くなっていること、また南端が川に向かって突出することが表現されており、堅穴A種の分布域を示している可能性が高い。図Ⅱ-19上段左右の写真は平板測量の様子である。樹木と奥の森林の位置関係から、比較的近くで撮影されたものとみられる。いずれも堅穴群(B)の現況によく似る。図Ⅱ-18の測量図には写真の撮影位置も示されており、これらの写真は、位置②からの撮影ということになる。当時樹木は疎らであったことが窺われる。奥に見える森林はおそらく調査区を分断する沢であることから、南から堅穴分布域を撮影したものと推定される。図Ⅱ-19下は堅穴の1つを撮影したとみられるもの。写真の上からマジックで窪みを示す円が示されている。図Ⅱ-18中の位置①からの写真であると判断される。測量結果にあてはめると、堅穴10ではないかと推察できる。これらの写真には貼り付けたスケッチブックのメモに「豊野B」等と書かれる以外には情報がなく、日付の記載もなかった。撮影、測量がいつ行われたのかは不明である。



図Ⅱ-18 興部高等学校所蔵図



図Ⅱ-19 興部高等学校所蔵写真

表Ⅱ-2 実測遺物一覧

図番号	図版番号	種別	分類	堅穴	トレンチ	層位	遺物番号	点数	法量(単位:mm)						重量(g)	取上日	石材	備考
									長さ	幅	厚さ	口径	器高	底径				
Ⅱ-16	1	6	土器 擦文	4	3B	カマド直上(6層)	7	1	-	-	-	-	(72)	104	-	2023/10/30	-	未接合2点
Ⅱ-16	2	6	土器 擦文	5	3B	カマド内(9層)	2	1	-	-	-	-	-	-	-	2023/10/31	-	フローテーション試料より
Ⅱ-16	3	6	土器 擦文	5	3B	カマド上(6層)	3	1	-	-	-	-	-	-	-	2023/10/26	-	
Ⅱ-16	4	6	石器 有意の礫片	4	1	床	1	1	89	68	38	-	-	-	4.2	2023/10/27	Ba	No.1
			石器 有意の礫片			床	3	1							31.7	2023/10/27	Ba	No.3
			石器 有意の礫片			床	4	1							60.8	2023/10/27	Ba	No.4
			石器 有意の礫			床	5	1							88.6	2023/10/27	Ba	No.5
Ⅱ-16	5	6	石器 有意の礫	4	1	床	6	1	61	90	28	-	-	-	249.8	2023/10/27	An	
Ⅱ-16	6	6	石器 フレイク	5	3B	カマド中(6層)	1	1	30	26	6	-	-	-	3.0	2023/10/26	Obs	
Ⅱ-16	7	6	石器 たたき石	17	A	Ⅱ	1	1	79	87	40	-	-	-	351.2	2023/10/18	Tuff	
Ⅱ-17	1	6	土器 続縄文 宇津内ⅡaⅡ			参考資料	1	-	-	-	-	283	489	107	-	不明	-	興部高等学校所蔵土器 1966年には現存

表Ⅱ-3 堅穴別出土遺物点数集計結果

堅穴番号	土器(分類)	石器				石器小計	礫						礫小計	総計
		An	Ba	Obs	Tuff		An	Cha	Gra	Mu	Sa	Tuff		
4	1(擦文)	2 (有意の礫・礫片)	4 (有意の礫・礫片)			6			1				1	8
5	2(擦文)			1 (フレイク)		1	9		92	4	2	4	111	114
14									7			1	8	8
15							1		12			5	18	18
17	1(焼成土塊)				1 (たたき石)	1								2
20	1(焼成土塊)						1		1				2	3
21								1	2				3	3
20・21	6(焼成土塊)													6
総計	11	2	4	1	1	8	11	1	115	4	2	10	143	162

Ⅲ 分析と総括

1 分析

(1) 出土炭化材の樹種同定について

ア. 対象試料

今年度興部豊野堅穴群(B)の調査における堅穴住居、堅穴4、5から出土した炭化材。また比較試料として令和3年度興部豊野堅穴群(A)の調査における、堅穴住居CR-19から出土した炭化材を対象とした。

イ. 方法

同定に必要な木口、板目、柾目の3断面の切片を片刃カミソリにより採取した。1断面試料ごとにアルミ製試料台に接着し、白金(Pt)蒸着を行った。使用機材は日本電子製オートファインコーターJEC-3000FC(40mA, 60秒)である。検鏡は走査型電子顕微鏡で行った。機材は日本電子製JSM-IT200である。

ウ. 同定結果

針葉樹1科1属、広葉樹2科2属を同定した。各分類群の解剖学的特徴等を記す。顕微鏡写真はa:木口面、b:板目面、c:柾目面。スケールバーは100 μ mである。

a (針葉樹)

・モミ属 (*Abies*) マツ科

木口) 軸方向組織は仮道管のみ認められる。早材から晩材への移行は比較的緩やか。板目) 放射組織は単列、3~13細胞高。柾目) 放射組織は放射柔組織のみ。壁は比較的厚く、垂直壁に数珠状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型。放射組織の数珠状末端壁の存在から判断した。(堅穴4 No.5)

b (広葉樹 環孔材)

・コナラ属 (*Quercus*) ブナ科

木口) 環孔材。年輪幅が著しく短く、小道管の配列は不明瞭である。孔圏道管にはチロースが認められる。板・柾目) 放射組織は同性で、単列のものと複合放射組織が認められる。環孔材であること、また複合放射組織の存在から判断した。(堅穴4 No.3)

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

木口) 環孔材。楕円形の大型道管が孔圏内にまとまって認められ、孔圏外では急激に管径を減じる。板・柾目) 放射細胞は同性。1~3細胞幅で10細胞高程度である。木口面の道管配列状況等から判断した。(堅穴4 No.1、2、4 堅穴5 No.1~13)

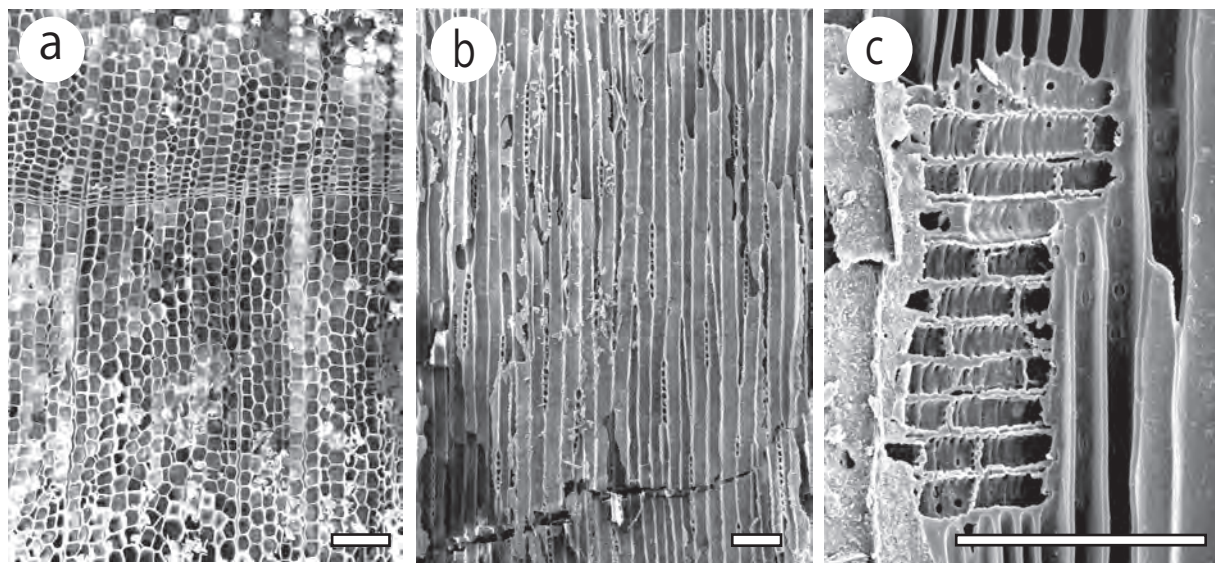
c (広葉樹 散孔材)

・不明散孔材 1

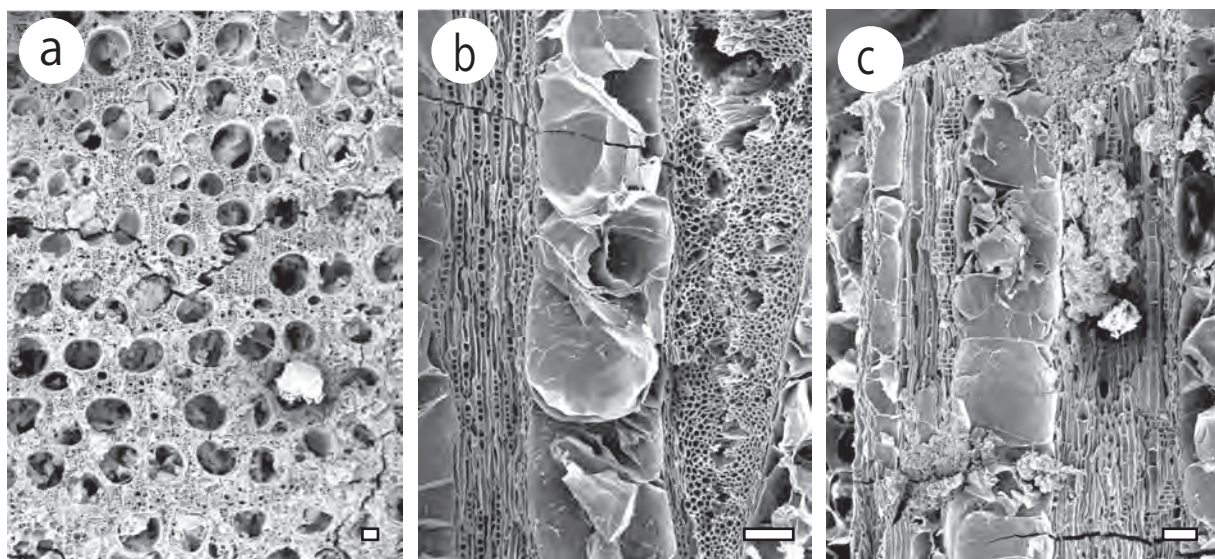
木口) 散孔材。道管は2~4個が複合するものも認められ、きわめて密に分布する。板・柾目) 放射組織は明瞭ではないが、単列とみられ、上下端が直立細胞となる異性。(CR-19 No.2)

・不明散孔材 2

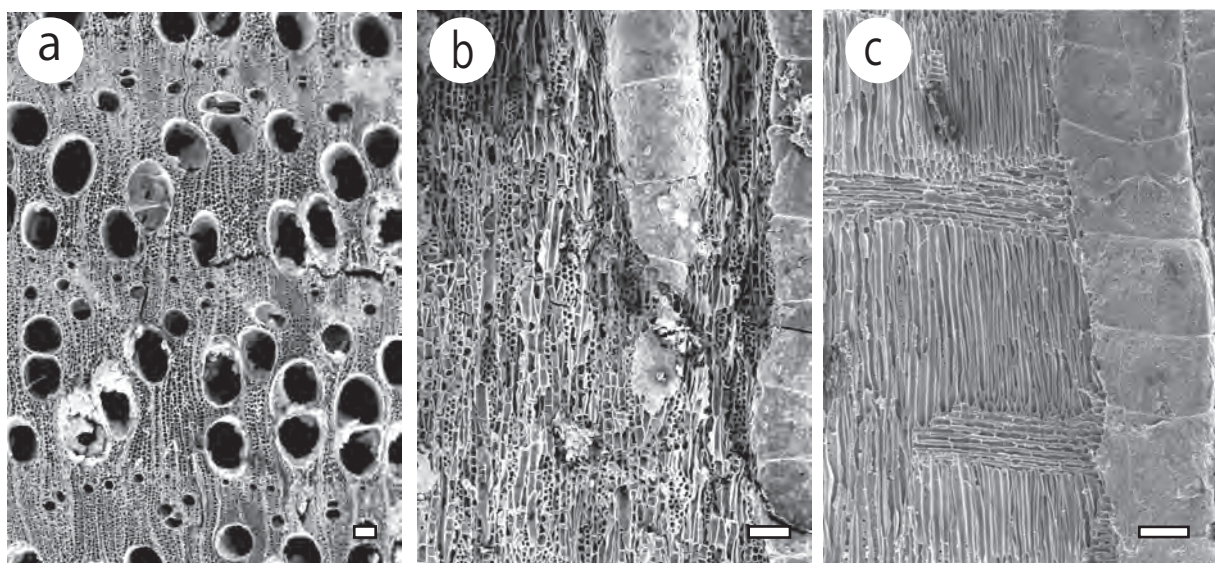
木口) 散孔材。道管は単独または2~4個が放射方向に複合する。晩材に向かって緩やかに径を減じている。板・柾目) 放射組織は単列で、3~27細胞高である。(CR-19 床)



モミ属 竪穴 4 No.5

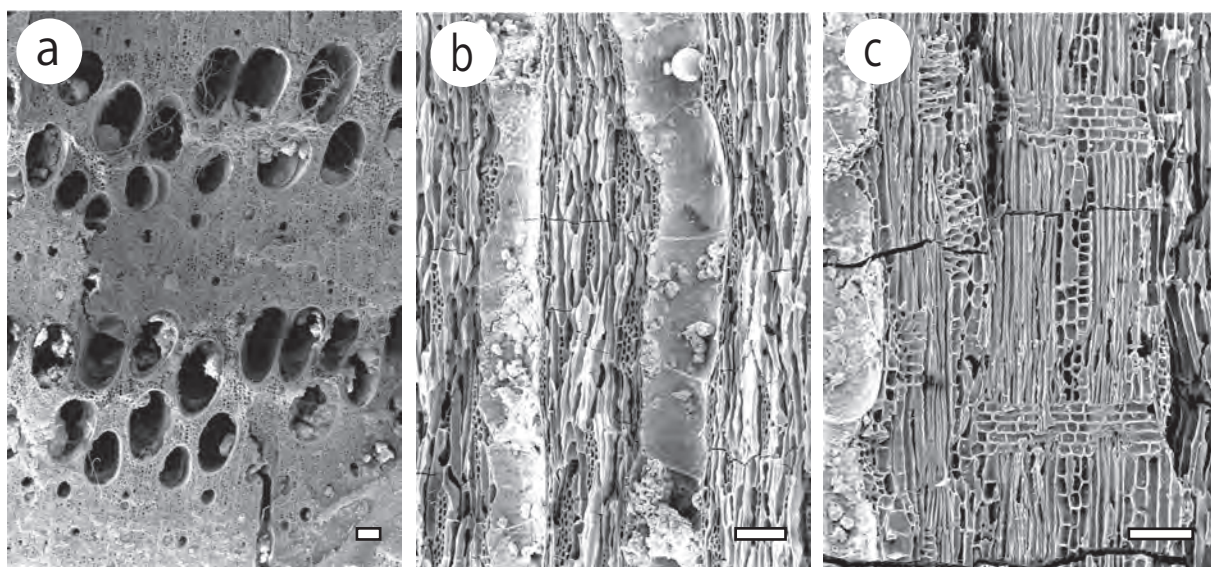


コナラ属 竪穴 4 No.3

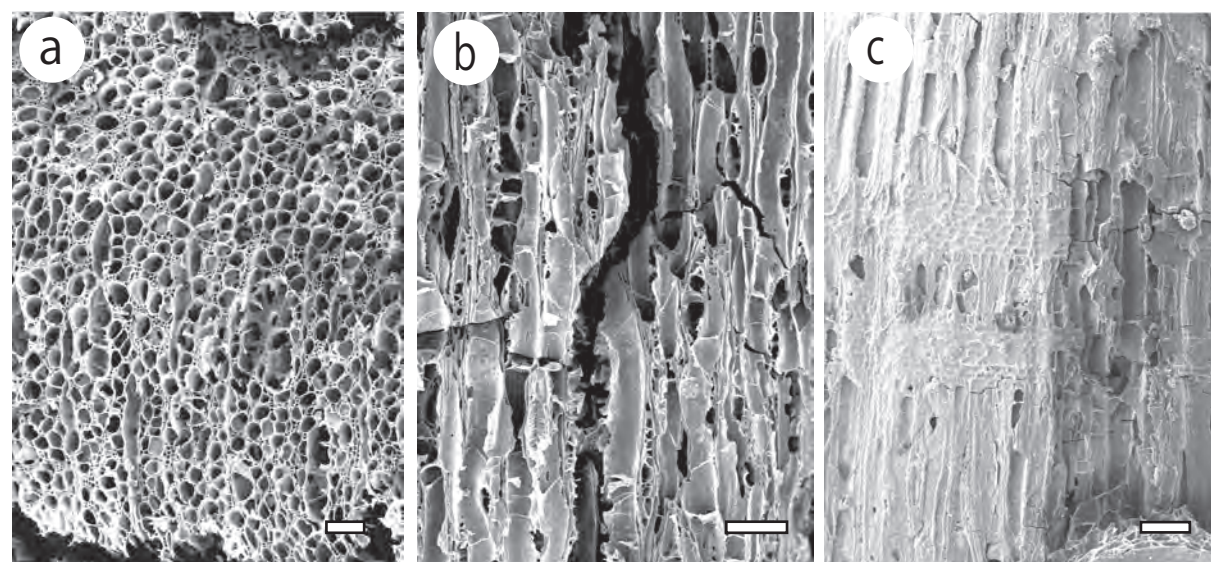


トネリコ属 竪穴 4 No.1

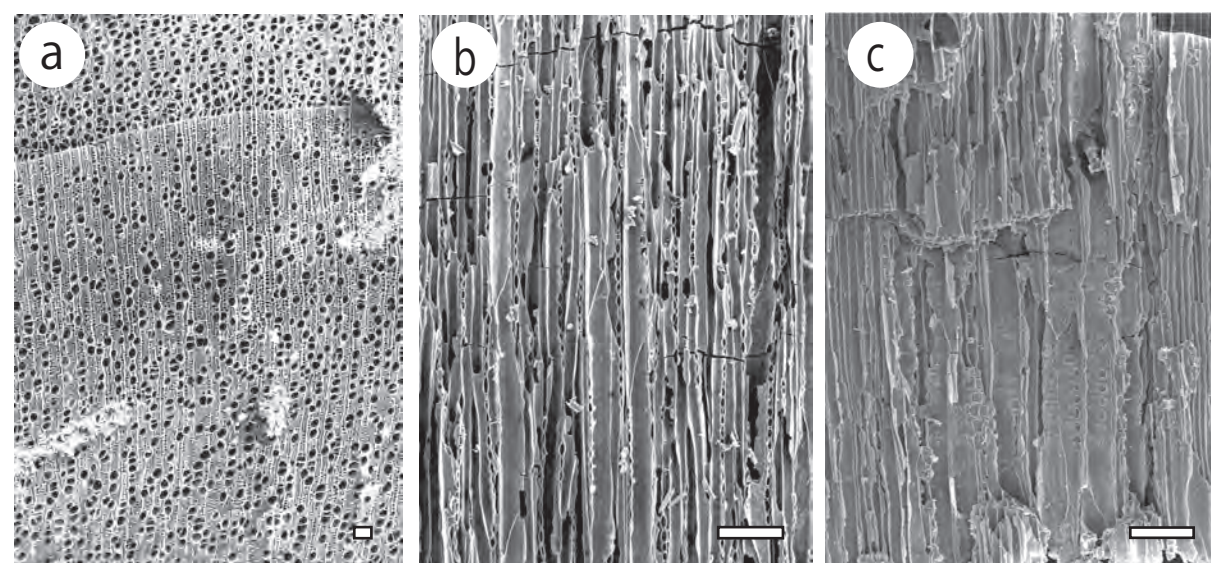
図Ⅲ-1 炭化材の電子顕微鏡写真(1)



トネリコ属 縦穴 5 No.9



不明散孔材 1 CR19 No.2



不明散孔材 2 CR19 床 2

図Ⅲ-2 炭化材の電子顕微鏡写真(2)

(2) 興部豊野堅穴群(A)堅穴8出土板状礫の素材岩石について

ア. 経緯

令和3年度興部豊野堅穴群(A)の調査において、堅穴8のカマド燃焼部の直上から大型の板状礫が出土した。この板状礫はカマド構造物の一部であったと解釈されるもので、大きさは $41.7 \times 41.0 \times 5$ cm、重さは12.7kgである。遺跡の周囲に同様な礫が見当たらないことから、遠方より遺跡に運び込まれたものと考えられる。その後の情報収集の結果、比較的近隣に位置する2か所の火成岩がその供給源の候補となることがわかった。一方は興部町沙留岬の玄武岩、他方は雄武町日の出岬に顕著な紫蘇輝石普通輝石安山岩である。この両者と遺跡出土板状礫の薄片を作成して比較検討を行う。板状礫の薄片の作成にあたっては興部町教育委員会より許諾を受け借用した。

イ. 沙留岬玄武岩の特徴

5万分の1地質図幅「興部」によると、新第三紀の併入岩とされ、沙留岬から沙留市街の海岸にかけて広く露出している。岩質は黒色緻密、塊状のもので、構成鉱物は普通輝石、橄欖石、斜長石であるとされる。顕微鏡写真は掲載されていない。以下この岩石を沙留岬玄武岩とする。

ウ. 日の出岬の紫蘇輝石普通輝石安山岩

5万分の1地質図幅「雄武」「沢木」「サンル」「上興部」「興部」の5図幅にまたがり分布する。名称はそれぞれ、(イナシベツ溶岩)(幌内越溶岩)(インサム溶岩)(ポロヌプリ溶岩)と呼称されるものである。記載される特徴は、板状節理のよく発達する暗灰色～黒色の緻密、堅硬な玄武岩を思わせる安山岩。顕微鏡下では、斑晶の多い順に斜長石、紫蘇輝石(斜方輝石)、普通輝石(単斜輝石)であることは共通している。少数の指摘としては斜長石の内部に粒状の斜方輝石が内包される(沢木)、部分的に曹長石化(沢木・興部)緑泥石化している(沢木・興部)。とされる。石基の記載には違いがみられ、ハイアロピリティック組織(沢木・興部・上興部)、またはインターサタル組織(サンル)とされる。以下この安山岩をイナシベツ溶岩とする。

エ. 薄片の比較

岩石表面の実体顕微鏡写真を口絵2上部に示した。板状礫とイナシベツ溶岩は、ほぼ自形の斜長石の斑晶が確認できる。沙留岬玄武岩は微細な斜長石らしき結晶が確認できる。いずれも顕著な板状を呈する礫で、色調も明瞭な違いを示さず肉眼のみで相違の判断は困難であった。

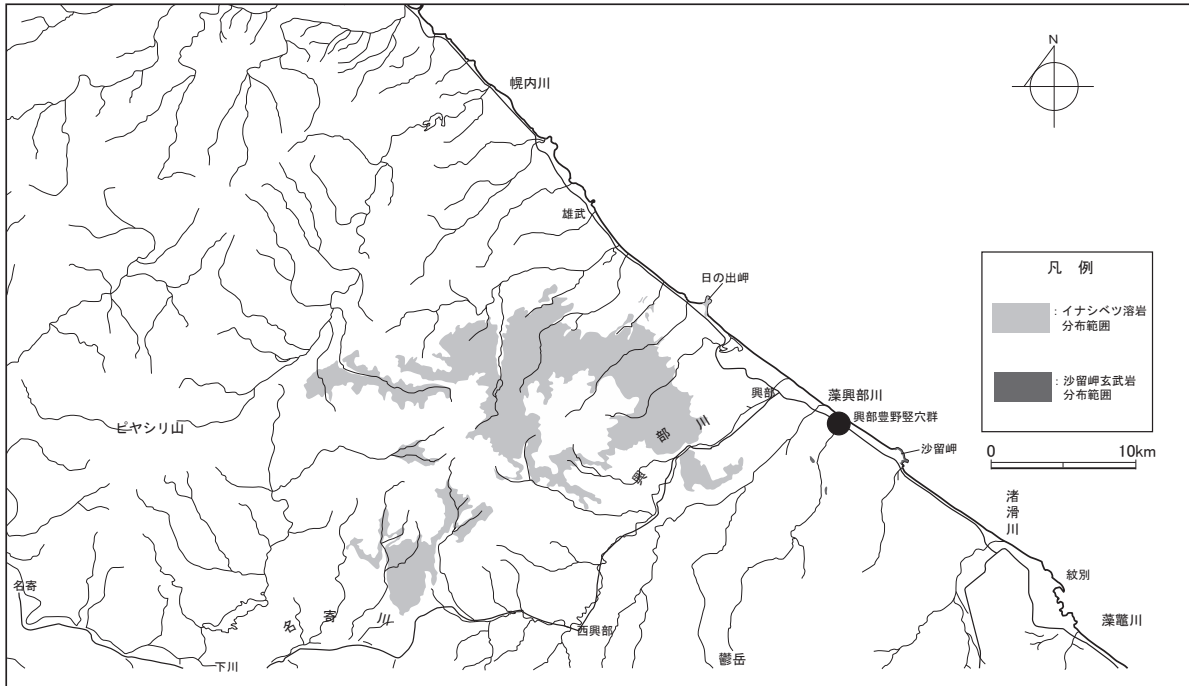
薄片は、各試料から岩石カッターを用いて1～2 cm角のチップを作成して製作した。検鏡は偏光顕微鏡(Nikon eclipse E600pol)、画像はデジタルカメラNikon DS1000によるものである。

40倍で撮影した偏光顕微鏡画像を口絵2中段および下段に示した。各画像は上がオープン、下がクロスニコルである。沙留岬玄武岩は一見して異なる。長柱状の斜長石の粒間に単斜輝石やマフィック鉱物に変質したとみられる緑泥石が認められる。いわゆるインターグラニューラー組織である。この組織は玄武岩に特徴的なものとされ、橄欖石が認められなかったものの、ほぼ地質図幅の記載通りである。

一方、イナシベツ溶岩と、堅穴8板状礫はよく似た特徴を示す。斑晶鉱物は斜長石、斜方輝石、単斜輝石の順に多く、石基は散在する斜長石の粒間をガラス等で充填されるインターサタル組織を呈する。異なる点はイナシベツ溶岩の方が若干単斜輝石に富むことである。イナシベツ溶岩は分布範囲すべてで板状節理が顕著であると記載されることも考え合わせると、堅穴8板状礫は、沙留岬玄武岩よりイナシベツ溶岩を素材とする可能性の方が高いといえる。

オ. 総括

本検討はたった2資料からの検討に過ぎない。供給源の確定のためには、擦文文化期の行動範囲を鑑みた広範囲の安山岩と比較検討を経なければならない。イナシベツ溶岩が供給源であったと仮定するなら、日の出岬は遺跡から16km北西、板状礫は海岸に豊富に露出しており、運搬も容易であったと想像される。



図Ⅲ-3 遺跡の位置と供給源候補石材の分布範囲

2 総括

調査の結果、竪穴10か所のうち3か所が擦文文化期の竪穴住居であることがわかった。竪穴住居は全て北西-南東方向に軸があり、南東側にカマドが作られる構造のものである。これらは大沢より南側の平坦面のみに分布している。隣接する竪穴4、5は測量結果及び掘上げ土の観察から竪穴5が新しい。ただしカマドの方向、炭化材の出土傾向など共通点は多い。出土遺物から明確にはできないものの、時期差はあっても比較的短いのではないかと想像される。

一方で、沢に向かう斜面には、近代の炭窯が作られる。炭窯に対応する平坦地や施設などもあったとみられ、当時は周辺の樹木を利用し木炭を製造しており、瑠椋川からの水運を利用して積み出しを行っていたと想像される。また、炭窯である竪穴17からはたたき石が出土し、竪穴5からは黒曜石製のフレイクが出土している。時期は限定できないが、調査範囲は登載カードにも記されたとおり縄文もしくは続縄文時代の遺跡でもあることの証左となる。

調査結果から、竪穴住居は主に擦文文化期に南側平坦部において形成されたと考えられる。標高13m~15mの川に向かって張り出す約3,000㎡を範囲としており、竪穴の位置は昨年度刊行の第18集ですでに公共座標を明らかにし、地籍図へ位置付けている。これにより所在地番も把握され、史跡指定範囲を確定するための情報を得たものとする。

以下、本章4節で確認した成果をまとめる。

- ① 擦文文化期の竪穴住居3軒を確認した。
- ② 大沢の周囲の斜面に位置する6か所の竪穴は、炭窯を中心とする施設であった。
- ③ 時期を判別した竪穴住居跡は全て擦文期と判断される。
- ④ 竪穴4と5では、5の方が新しい。
- ⑤ 竪穴住居は3軒全てカマドとみられる焼土を検出しており、その方位は全て南東である。
- ⑥ 竪穴住居は3軒全て北西-南東を軸とするほぼ正方形を呈する。
- ⑦ 竪穴住居3軒のうち、2軒、竪穴4・5の東側において、炭化材が出土している。
- ⑧ 竪穴住居跡に伴う遺物は、竪穴4で擦文土器の底部、有意の礫・礫片が、竪穴5では甕口縁部片が出土している。
- ⑨ 薄片観察から、興部竪穴群(A)竪穴8の調査で出土した板状礫は、雄武町日の出岬周辺に認められる紫蘇輝石普通輝石安山岩に近い石であることがわかった。
- ⑩ 竪穴4・5から出土した炭化材の樹種は、針葉樹のモミ属、広葉樹のコナラ属、トネリコ属で擦文文化期の竪穴住居の樹種として一般的なものである。

調査の結果、瑠椋川下流に位置する興部豊野竪穴群(A)と同じ、擦文文化期の竪穴住居があることがわかった。両者は時期や規模や住居構造が似ているが、詳細において異なる部分もある。差異の1つに焼失住居の割合がある。竪穴群(A)においては9軒中焼失が想定されるものはなく、炭化材がCR-19で検出されるにすぎない。一方竪穴群(B)においては、3軒のうち隣り合う大型住居の2軒が焼失している。調査数が少ないため本例のみでは結論には至らないが、焼失住居の比率については、以前より指摘される擦文文化期が高率で焼失することに加え、比較的狭い地域で遺跡立地により焼失率の差異があることが近年指摘されている(熊本2021)。こうした焼失竪穴住居の研究現況に加え、本報告で試みた竪穴群(A)出土の板状礫の素材岩石供給地の推定は、当地域当時期の交流関係を考える上でも有益といえる。いずれも今後さらに検証を深めていくべき事項である。

【引用・参考文献】

報告書等

- 北海道立埋蔵文化財センター 2021 『重要遺跡確認調査報告書第16集』
 2022 『重要遺跡確認調査報告書第17集』
 2023 『重要遺跡確認調査報告書第18集』
 北海道名寄高等学校定時制課程郷土研究部 1965 『道北文化研究 No.5』
 興部町役場 1961 『興部町史』

論文等

- 宇田川洋 1980 「擦文文化」『北海道考古学講座』 みやま書房
 熊木俊朗 2018 『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』
 榊田朋広 2016 『擦文土器の研究』 北海道出版企画センター
 熊木俊朗 2021 「第三節 大島2遺跡における擦文文化の竪穴住居跡と出土遺物Ⅱ」『アイヌ文化形成史上の画期における文化接触:擦文文化とオホーツク文化-大島2遺跡の研究(2)』 東京大学大学院人文社会研究科付属北海文化研究常呂実習施設
 塚本浩司 2002 「擦文土器の編年と地域差について」『東京大学考古学研究室研究紀要17』 東京大学考古学研究室
 長谷川潔・魚住悟 1975 『5万分の1地質図幅説明書 興部』 北海道立地下資源調査所
 鈴木 守・国府谷盛明・藤原哲夫 1966 『5万分の1地質図幅説明書 雄武』 北海道地下資源調査所
 斎藤昌之 1964 『5万分の1地質図幅説明書 沢木』 北海道地下資源調査所
 酒匂純俊・土居繁雄・太田昌秀 1960 『5万分の1地質図幅説明書 サシル』 北海道開発庁
 長谷川潔・長尾捨一・河内晋平・吉田勝 1969 『5万分の1地質図幅説明書 上興部』 北海道開発庁



竪穴 4 (西から)



竪穴 4 トレンチ 3 A 土層断面 (南から)



竪穴 4 トレンチ 1 土層断面 (南から)



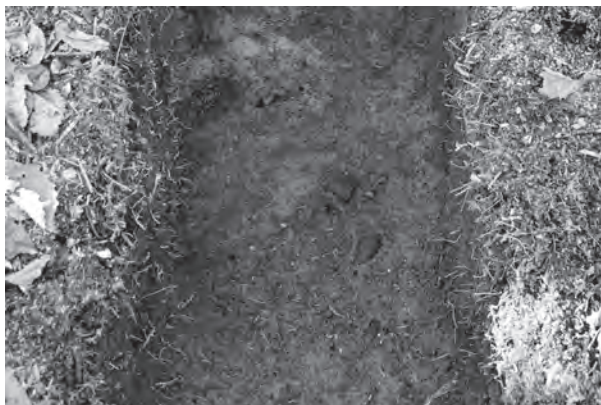
竪穴 4 トレンチ 3 B 土層断面 (北東から)



竪穴 4 トレンチ 2 土層断面 (北から)



竪穴 4 トレンチ 3 B カマド断面 (南西から)



竪穴 4 トレンチ 2 遺物出土状況 (南東から)



竪穴 4・5 間トレンチ 掘上げ土堆積状況 (北から)



竪穴 5 (西から)



竪穴 5 トレンチ 3 A 土層断面 (南から)



竪穴 5 トレンチ 1 土層断面 (南東から)



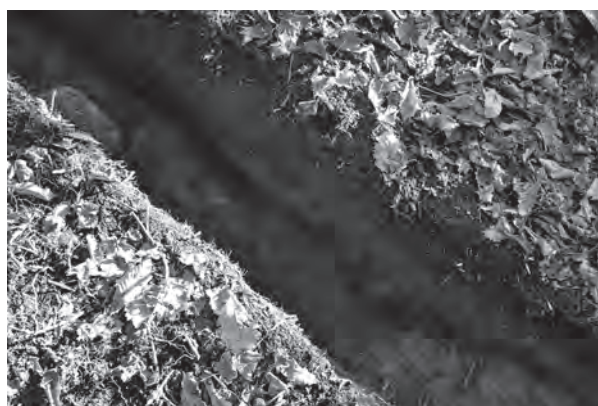
竪穴 5 トレンチ 3 B 土層断面 (北から)



竪穴 5 トレンチ 2 土層断面 (南東から)



竪穴 5 トレンチ 3 B カマド検出 (北西から)



竪穴 5 トレンチ 3 B カマド土層断面 (北東から)



竪穴 5 トレンチ 3 A 炭化材出土状況 (北西から)



竪穴14トレンチ 土層断面（北から）



竪穴16トレンチ 土層断面（東から）



竪穴15 調査状況（南西から）



竪穴15トレンチ 焼土検出（北東から）



竪穴15トレンチ 土層断面（北東から）



豎穴17トレンチ 土層断面（東から）



豎穴18トレンチ 土層断面（北から）



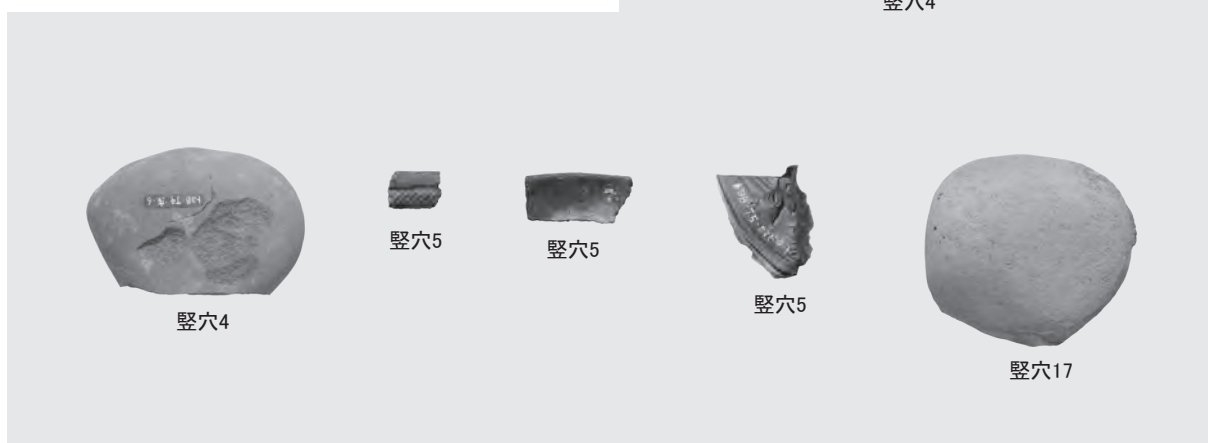
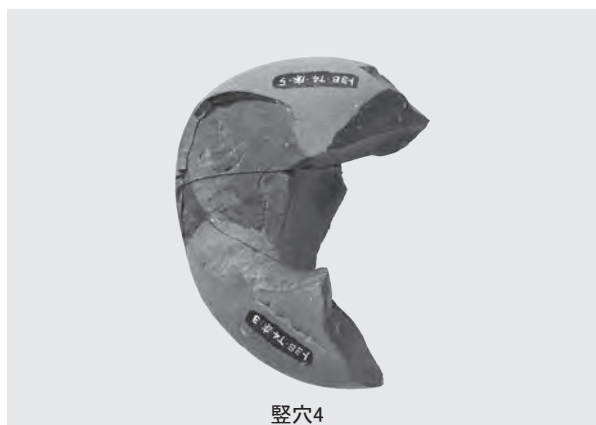
豎穴19トレンチ 土層断面（南から）



豎穴20トレンチ 土層断面（南から）



豎穴21トレンチ 土層断面（北東から）



出土遺物



報告書抄録

ふりがな	ほっかいどうりつまいぞうぶんかざいせんたー　じゅうよういせきかくにんちょうさほうこくしょ　だいじゅうきゅうしゅう							
書名	北海道立埋蔵文化財センター　重要遺跡確認調査報告書　第19集							
副書名	興部町興部豊野竪穴群(B)							
巻次								
シリーズ名	重要遺跡確認調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	立田　理　　菊池慈人							
編集機関	北海道立埋蔵文化財センター指定管理者　公益財団法人北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832　北海道江別市西野幌685番地1　TEL 011-386-3231							
発行年月日	西暦　2024年3月29日							
<div>ふりがな 収録遺跡</div>	<div>ふりがな 所在地</div>	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
<div>おこつべとよの 興部豊野 たてあなぐん 竪穴群(B)</div>	<div>ほっかいどうもんべつぐん 北海道紋別郡 おこつべちやうあぎとよの 興部町字豊野 9-1</div>	01561	I-24-7	44度 45分 31.43秒	143度 16分 73.38秒	2023 1011 ～ 1101	40.3㎡	重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
興部豊野 竪穴群(B)	集落跡	擦文文化期	竪穴住居3軒	擦文土器		発掘調査		
要約	<p>遺跡は興部町市街南東部約4km、オホーツク海から約800m内陸、瑠椋川の左岸、南西方向から海に向かって伸びる低平な台地の東縁にあたる。約600m下流の台地先端には豊野竪穴群(A)が位置する。</p> <p>昨年度の測量調査の結果確認した、竪穴26か所のうち10か所をトレンチ調査した。 このうち竪穴住居は3軒で、全て北西-南東方向に軸があり、南東側にカマドが作られる擦文文化期の竪穴住居である。竪穴4、5は隣り合う2か所の焼失住居で、掘上げ土の重複から竪穴5が新しいことが判明した。このほか、調査区を隔てる大きな沢の両岸に分布する6か所の竪穴は、近代の炭窯1基を中心とした2組の施設であることがわかった。</p> <p>令和3年度の興部豊野竪穴群(A)の調査で出土した炭化材とともに、樹種同定を行った。 また、同調査で竪穴8から出土した板状礫の偏光顕微鏡による石質鑑定を実施した。</p>							

北海道立埋蔵文化財センター
重要遺跡確認調査報告書 第19集

発行年月日 令和6年3月29日

編集 北海道立埋蔵文化財センター指定管理者
公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

発行 北海道立埋蔵文化財センター

〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地 1

TEL 011-386-3231 FAX 011-386-3238

URL <http://www.domaibun.or.jp>

印刷：社会福祉法人 北海道リハビリー

〒061-1195 北海道北広島市西の里507番地 1

TEL 011-375-2116(代) FAX 011-375-2115
